

長野遺跡群

# 善光寺門前町跡(4)

—八幡屋議五郎大門町店増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月

長野市教育委員会



長野遺跡群

# 善光寺門前町跡(4)

—八幡屋議五郎大門町店増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月

長野市教育委員会



## 序

日本最古と伝わる一光三尊阿弥陀如来像、いわゆる善光寺如来像を本尊とする善光寺は、日本を代表する仏教寺院の一つであり、国宝に指定されている本堂をはじめ、重要文化財の三門・経蔵など、境内には貴重な歴史的建造物が多数残されています。中世以降の浄土信仰や女人救済思想の影響、鎌倉幕府の保護、善光寺聖の勧進や出開帳などによって、「牛に引かれて善光寺詣り」「一生に一度は詣れ 善光寺」と言われるように、古来から多くの参拝客で賑わってきました。現在では、日本全国はもとより、海外からの観光客も増え、年間約600万人もの多くの老若男女が訪れるようになりました。

本書に所収しております善光寺門前町跡は、古くは古墳時代の遺構も見つかっていますが、中世以降に人・モノ・情報が集積する長野盆地の中核地として発展してきた門前町です。近年、観光客の賑わいに呼応するように参道の石疊化や周辺建物の建て替えなどの各種開発工事が増えつつあり、賑わいにますます拍車がかかっているようです。

このたび、平成19年に発掘調査を実施しました店舗の増築工事が行われることになり、開発業者との保護協議を経て、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。長野市の埋蔵文化財第142集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載しております。連錦と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護に対する深いご理解と発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました、開発業者である株式会社八幡屋戯五郎の皆様、実際の作業にあたりご理解・ご協力を賜りました調査地近隣の皆様、発掘作業に携わっていただきました発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

2016(平成28)年3月

長野市教育委員会

教育長 近藤 守



## 例　　言

1. 本書は、株式会社八幡屋礪五郎による八幡屋礪五郎大門町店増築工事に伴い、記録保存を目的として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 埋蔵文化財発掘調査の実施に関しては、株式会社八幡屋礪五郎と長野市との間で協定及び委託契約を締結し、平成26年度に発掘作業、平成27年度に整理及び報告書作成を実施したものであり、業務は長野市教育委員会(文化財課埋蔵文化財センター担当)が履行した。
3. 発掘調査地籍は、長野市長野大門町86-1他で、起因となった開発事業面積178m<sup>2</sup>全域を保護対象面積とし、そのうち133m<sup>2</sup>を発掘調査対象面積として調査を実施し、実質調査面積は120m<sup>2</sup>である。
4. 測量業務は株式会社写真測図研究所に委託した。本書の図中の座標・標高は、平面直角座標系の第VII系座標値(日本測地系2000)と、日本水準原点の標高に基づく。
5. 本書に実測図を掲載した遺物は掲載番号を通し番号とし、金属製品についてはX線撮影の番号を別に付した。
6. 本書の編集執筆は飯島の指導の下、田中が担当した。遺構図整理・遺物整理・表作成・遺物写真撮影等は田中と向山純子で行った。
7. 本書図中に用いたトーンは以下の通りである。

 鉄軸  煤  砂目  墓底  朱墨

8. 発掘調査で得られた諸資料は長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが保管している。なお遺跡略号は「NGYZ」としている。

## 目次

### 序文・例言・目次

第Ⅰ章　調査の経過	1
第1節　調査に至る経緯と調査経過	
第2節　調査体制	
第3節　調査日誌	
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境	4
第1節　地理的環境	
第2節　歴史的環境	
第Ⅲ章　調査成果	8
第1節　調査概要	
第2節　遺構	
第3節　遺物	
第Ⅳ章　まとめ	13
報告書抄録・奥付	



# 第Ⅰ章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯と調査経過

善光寺の門前町一帯は、古くからの町屋としての町割りが残る歴史的な景観を見せていく地域で、近年は街並み環境整備事業などによって石畳風道路や建物の美観化が進んでいる。中央通沿いに軒を並べる八幡屋磯五郎大門町店は、平成19年の店舗新築工事の際に発掘調査を実施しており、長野市の埋蔵文化財第121集として報告書が既に刊行されている。今回その店舗の増築工事が計画され、開発事業者である株式会社八幡屋磯五郎から埋蔵文化財の取り扱いに関する照会がなされたのは、平成25年12月2日に遡る。翌年1月9日に既存建物の解体工事の際に近世末期以前の遺物包含層を確認したことから、2月24日付で文化財保護法第93条の規定に基づく届出が提出され、27日付で保護措置として「発掘調査」を指示した。その後、保護協議を重ねる中で、平成26年度に現地における発掘作業を実施し、整理作業と報告書の刊行を平成27年度とする「埋蔵文化財発掘調査協定書」を4月14日に締結した。16日付で平成26年度分の「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、現地での発掘調査は4月17日から6月3日までの48日間実施した。平成27年度分は平成27年4月6日付で委託契約を締結し、整理調査を実施して本書を刊行した。

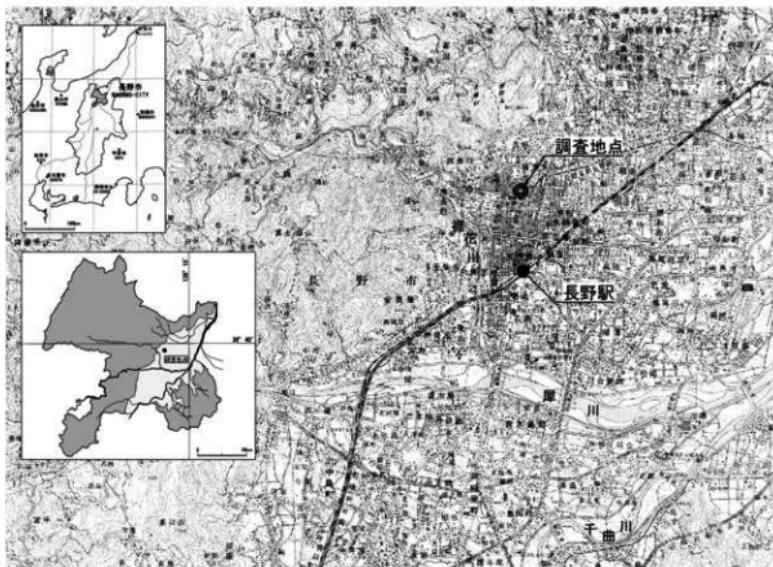


図1 調査位置図 ( $S = 1/100,000$ )

## 第2節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直営事業として長野市埋蔵文化財センターが実施し、その組織は以下のとおりである。なお発掘調査に使用する大型重機・機材等は、事業者（調査依頼者）から提供を受けた。

調査主体者	長野市教育委員会	教 育 長	堀内征治（～H26.3）	近藤 守（H27.4～）
調査機関	文化財課	課 長	青木和明	
	埋蔵文化財センター	所 長	小山敏夫	
	庶務担当	係 長	竹下今朝光	
		事務職員	大竹千春	
	調査担当	係 長	飯島哲也（調査担当者）	
		風間栄一		
		主 事	小林和子	
	専 門 員	柳生俊樹 高田亜紀子 田中曉穂（主任調査員）		
		遠藤恵実子 日下恵一 篠井ちひろ 清水竜太		
発掘作業員	伊藤咲子 江守久仁子 岡沢貴子 岡宮純子 駒村文男 杉本千代 諏訪里子 峰村茂治			
	村田岳仁			
遺構測量委託	株式会社 写真測図研究所			
石材鑑定	長野市立信州新町博物館 係 長	畠山幸司		
X線写真撮影	長野県立歴史館			

発掘調査事業の委託者である株式会社八幡屋儀五郎におかれでは、埋蔵文化財保護に対する深いご理解に基づき、重機等の提供を含め円滑に調査事業を実施できるよう多大なるご配慮を賜った。整理作業においては長野県立歴史館 白沢 勝彦氏にX線写真撮影についてご指導を賜った。陶磁器・土器については長野県埋蔵文化財センター市川隆之氏より御教示賜った。調査にご協力頂いた各位に記して厚く御礼申し上げる。



写真1 発掘作業に参加された皆さん

### 第3節 調査日誌

- 4月 17日 器材搬入、重機による表土除去開始  
22日 作業員による遺構検出開始  
23日 1次面遺構検出状況撮影  
24日 遺構調査開始  
28日 1次面全景撮影
- 5月 1日 遺構測量  
7～13日 重機による包含層掘削開始、山留工・汚水切回し等行う  
14日 作業員による遺構検出、2次面遺構検出状況撮影  
15日 遺構調査  
16日 2次面全景撮影、遺構測量  
19日 重機による包含層掘削開始、山留工  
20日 作業員による遺構検出  
22日 3次面遺構検出状況撮影  
23日 遺構調査開始、調査区内雨水除去のため沈澱槽・水中ポンプ設置  
30日 3次面全景撮影、遺構測量
- 6月 2日 東調査区の重機による表土掘削、1・2次面調査・測量  
3日 2・3次面遺構調査・測量、器材撤収して調査を終了



写真2 表土除去



写真3 作業風景(1)



写真4 作業風景(2)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

長野遺跡群は裾花川河岸段丘と湯福川扇状地による複合地形上に立地する。裾花川・湯福川はどちらも北西—南東方向の流路で、裾花川は現在の里島付近から小河川に分流していた。これらの川を古代から用水として利用していたのである。近世初頭に松城（後の松代城）城代花井吉成により現在の南下する河道に整備変更された。湯福川も宝永4年（1707）の善光寺本堂移転を機に現在の流路へと変更されたが、それ以前は図3にあるように旧本堂の北東を通る、直線的な流路であったと推定されている。湯福川扇状地は裾花川河岸段丘を覆って急傾斜をなし、調査地を含む善光寺門前町周辺においては北西から南東に傾斜している。地盤は岩塊をふくむ砂礫堆積で水はけがよく堅致である。周辺の発掘調査では、善光寺門前町形成以前から居住域として利用されていたことが確認され、生活に好適な環境であったと伝えられる。

善光寺周辺では善光寺とその門前町を形成・維持するため、地形の傾斜を水平に修正するための造成に大量の石塔類が使用され、火災後の整地などの地業も確認できる。弘化4年（1847）の火災による塵芥処理のため空閑地に埋設した例は調査の中で多く見受けられる。本調査地点も門前町の北端を東西に横切る横町通りに面しているが、通りに沿って弘化4年の火災に伴う廐棄土坑が検出された。当時の絵図等では調査地点が町屋地域に含まれることは確認できるが、具体的に空閑地であったかは不明である。近代においては参道に面して商店が並び、調査地点はその裏手にあたり、横町通りに沿ってやや東よりに小規模な店舗があったと想定される。調査区内においても地形の北西—南東方向への傾斜が見られ、北側を削平し南側に盛土を行っていたと見られる。また南北方向の石組水路が調査区の東西端にあり、調査範囲がおよそ町屋1軒分の間口に当たるものと推測される。



図2 地形図 ( $S = 1/10000$ )

## 第2節 歴史的環境

調査地周辺では、大規模な調査として平成7・8年に国道406号線・市道県庁大門町線の道路拡幅に伴う発掘調査（西町遺跡・東町遺跡）および、関連事業として中央通りの歩道改修事業の工事立会が行われている。その後も店舗建築・増築など小面積の調査の蓄積により善光寺門前町の様相が次第に明らかになりつつある。

**西町遺跡** 繩文時代から現代に至る遺構を確認した。遺構の重複が激しく、繩文時代から古代の遺構は遺存状態が悪い。中世段階の遺構は大門地区に集中する。13世紀から15世紀後半に相当し、門前町形成に関わると考えられる遺構・遺物である。近世段階は、火災災地および近代以降の建築物基礎により破壊され残存状態は悪いが、門前町の商業に関連する遺構・遺物を確認した。

**東町遺跡** 弥生時代から近世に至る遺構を確認した。弥生・古墳時代の遺構は湯福川の氾濫堆積に厚く覆われていて遺存度がよい。この氾濫堆積上に中世・近世面を確認した。

**善光寺門前町跡** これまで竹風堂善光寺大門店地点（以下、竹風堂地点）・八幡屋磯五郎大門町店地点・店舗併用住宅地点で調査が行われた。いずれも善光寺参道に面した重要な位置にある。西町遺跡A地区で検出された溝SD1は竹風堂地区区画溝（SD1）と平行する位置関係にあり時期も同じ（13世紀後半）ことから當時、善光寺を中心とする一帯に土地整理事業が行われ、それは12世紀末の善光寺再興にともなうものであったと想定する。八幡屋磯五郎大門町店地点においても溝跡は検出されており、参道脇南北方向の溝である。時期としては14世紀～16世紀末と推定されている。店舗併用住宅地点では14世紀後半～近代の遺構が見られた。

**元善町遺跡** 近世以前の善光寺本堂推定範囲であるため、古代瓦の出土量は著しい。大本願明照殿地点では近江の湖東式瓦が出土している。本調査地点とは参道を挟んで近接し、古代～近代の遺跡である。

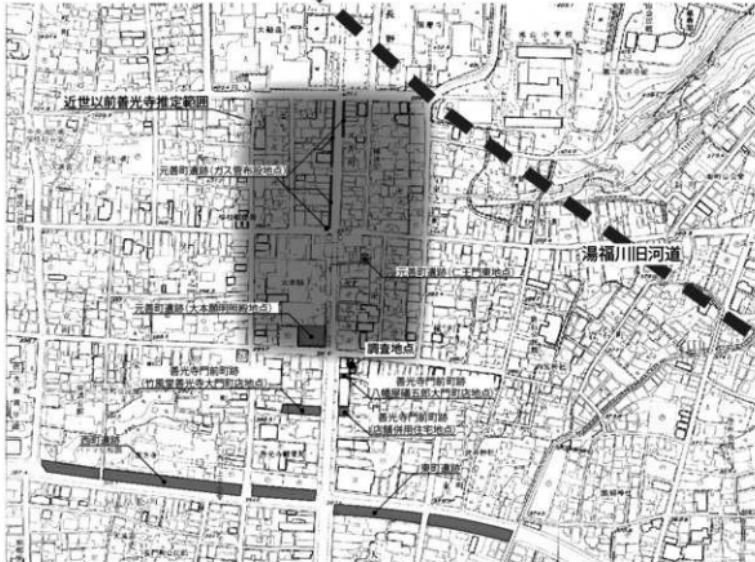


図3 周辺の遺跡と今回調査地点 (S = 1/5000)

## 善光寺の成立

善光寺の僧職である「善光寺別当」が初めて文献史料に登場するのは1096年の記録（『後二条師通記』）である。それ以前の善光寺については『善光寺縁起』、平安時代の仏教説話集（『僧妙達蘇生注記』等）、本尊の様式、旧境内から出土した古代瓦から推測されるにすぎない。平安時代末期から中世にかけては極楽浄土の教えが広まった時代であり、11世紀末頃に中央の大寺院園城寺の末寺となった善光寺は阿弥陀信仰の靈地として次第に発展していった。しかし1179年、火災によって寺は消失し礎石を残すのみとなった（『吾妻鏡』）。1191年源頼朝の命により再建され、その後も時の権力者の庇護を受けた。戦国時代末期には上杉謙信・武田信玄が本尊を移したことにより一時衰退したが、江戸時代に入り再興された。元善町にあったそれまでの本堂が今の位置に造営されたのは1707年（宝永4）のことである。

## 門前町の成立

善光寺は、宝永4年（1707）までは今の元善町に本堂があり、県道豊野線は本堂に直行する参道であった。また、現本堂が位置しているところには北之門町があり、本堂の移転に伴って立ち退きとなった。このように、移転以前の善光寺門前町は、本堂を中心に東西南北の参道に沿って発達していたことがうかがえる。この景観は、参道に参詣者目当ての商人・職人が集住したのがはじまりであると考えられ、その後商業地として特化したものである。西町遺跡や門前町跡の発掘調査成果からは堅穴建物・陶磁器・渡来銭が出土し、門前町としての成立が13世紀『一遍上人絵詞』と一致することがわかる。『大塔物語』には応永6年（1399）信濃守護職に就いた小笠原長秀が、同7年（1400）善光寺に入り、国内に向けて指示を行ったことが描かれる。その際に「凡そ善光寺は、三国一の靈場にして（中略）門前に市をなし、堂上花の如く」道俗男女・貴賤上下でにぎわう様子が書かれている。

江戸時代に入ると北国街道の本格的な整備に伴い、善光寺宿には本陣が置かれ、大門町は旅籠屋営業の特権を持つこととなる。18世紀に入る頃には参道の両脇に旅籠が立ち並ぶようになる。文政10年（1827）に出版された『諸国道中商人鑑』中仙道・善光寺之部には、この他にも飲食店や薬・金細工・刀・呉服・茶など様々な店が掲載されており、大門町の繁昌ぶりがわかる。近代に入って、現在の国道403号線より北の参道、中央通沿いには23軒の商店が軒を連ね、銀行・書店・洋品店も出店している。この中で目立つのは洋品を扱う商店で、洋酒や煙草・ランプ・雑貨など様々で、近代の文化が善光寺の周辺にも波及していたのである。現在も江戸時代から続く老舗が残り、日本のみならず海外からの観光客が訪れて賑わいを見せている。



写真5 現在の門前町

西暦	和暦	善光寺・門前町に関する事象	時代
9世紀後半		瓦葺きの建物が存在（善光寺前身寺か？）	平安
1179	治承3	火災により善光寺焼失（『吾妻鏡』）	
1187	文治3	源頼朝が信濃国目代等に善光寺再興を命じる（『吾妻鏡』）	
1191	建久2	善光寺再建落成（『吾妻鏡』）	
1268	文永5	善光寺で火災（『栗田家記』）	鎌倉
1313	正和2	善光寺で火災（『立川年代記』）	
1370	応安3	火災により善光寺全焼（『花當三代記』）	室町
1407	応永14	宝塔再建（『三井続燈記』）	
1425	応永32	火災により善光寺全焼（諸堂塔廻らす焼失）（『看聞日記』）	
1427	応永34	善光寺で火災（『王代記』）	
1474	文明6	火災により如来堂焼失（『尊尊大僧正記』）	
1558	永禄1	武田信玄が本尊を甲斐に移す（『甲州善光寺文書』）	
1597	慶長2	豊臣秀吉が甲斐善光寺如来を京都方廣寺大仏殿に移す（『甲斐善光寺文書』）	安土桃山
1598	慶長3	本尊が信濃に戻される（『梵舜日記』）	
1599	慶長4	豊臣秀頼が如來堂を再建（『当代記』）	
1601	慶長6	徳川家康が善光寺に千石の領地を与える（大門町を含む）（『栗田文書』）	江戸
1615	元和1	落雷により本堂（如来堂）焼失、諸堂・寺中全焼（『御還座縁起』）	
1642	寛永19	仮堂が焼失（『善光寺記録』）	
1650	慶安3	如来堂仮堂を再建（『善光寺旧事見聞記』）	
1666	寛文6	仮本堂（寛文如来堂）を再建	
1688	元禄1	東之門町から出火、横町等焼失（『唐沢氏文書』）	
1692	元禄5	本堂再建の為の出開帳が寺社奉行より認可される（『如来三都御回国御開帳日記』）	
1700	元禄13	火災により再建中の本堂・焼失（『大勧進文書』）	
1705	宝永2	西之門町より出火、大本願・三寺中・東之門町等焼失（『長野史料』）	
1707	宝永4	本堂再建（『善光寺本堂建立由来留書』）	
1750	寛延3	三門再建（『さざれ石』）	
1751	宝曆1	堂庭の販売商品について、大門町から訴えあり（『長野市史考』）	
1759	宝曆9	西之門町より出火、大本願・町屋一帯 1500軒を焼失（『観音堂縁起』）	
1830	天保1	経藏落成（『別当伝略』）	
1846	弘化3	宿坊と大門町が旅客の宿泊について争う（『大勧進文書』）	
1847	弘化4	大門町以外の宿屋営業を禁ずる（『長野市史考』）	
1864	元治1	善光寺地震により家屋 3000戸、仁王門・大本願等焼失（『むし倉日記』）	
1871	明治4	仁王門再建（『善光寺取調書』）	近代
1891	明治24	上知合により善光寺領を中野県（のち長野県）に編入	
1908	明治41	5.24 東之門町から出火、伊勢町・岩石町・元善町焼失	
1918	大正7	6.2 上西之門より出火、仁王門・大本願・院坊・元善町等焼失	
1953	昭和28	本堂が国宝に指定	
1965	昭和40	三門・経蔵が重要文化財に指定	現代

表1 善光寺関連の年表

# 第Ⅲ章 調査成果

## 第1節 調査概要

今回の発掘調査地は大門町東横町通りにあり、これまでの門前町跡の調査地点とは異なり、小路に面した敷地である。調査範囲は概ねL字形をしているが、通りに面した位置には以前は別の店舗があった。また東の張出し部分は地下室があったため、南半分は擾乱を受けていた。試掘調査の結果に基づき、遺構検出面を設定、重機で表土を除去し、その後遺構検出及び遺構掘り下げを人力で行った。検出した遺構の中で特に掘削深度の大きいもの、巨礫が混入するものについては作業上の安全面を考慮して未完掘である。遺構の記録保存について、遺構実測図作成に係る測量を株式会社写真測図研究所に業務委託し、調査員が現地で作図した。調査区東部分については平面図を平板測量により、作図した。遺構写真撮影は35mm一眼レフカメラ、モノクロネガ・リバーサルフィルムを用い、補助として一眼レフデジタルカメラを用いた。

基本層序は図4に示した。遺構確認面は3面を設定し、各面の地表面からの深度は1次面が約30cm、2次面が約50cm、3次面が約70cmである。出土遺物の年代に基づき、1次面は幕末～近代、2次面は18世紀代、3次面は中世・17世紀代と判断した。各層は黄灰あるいは暗褐色シルトで、焼土や炭化物・礫を含み、火災後の整地層と見られる。各層の年代に関しては、近接する元善町遺跡大本願光明殿地点の各遺構検出面の年代に対応することが判明した。

調査区内は近世～現代の段階での変更が著しく、特に礫の取り扱いには苦慮した。礫について遺構か擾乱か極力現場で判断したが、報告書作成段階で各層の平面図照合により、建物基礎と確認できた。このため、建物跡1～3は遺構なしNaを付していない。建物跡は掘削痕跡が明瞭でなく、出土遺物も僅少であるため、基礎構造を考慮して根石や造成が初めて確認された層を建物構築時期として捉えた。



図4 基本層序 ( $S = 1/20$ )

## 第2節 遺構

### (1) 1次面

幕末～近代に至る面で、遺構は南北方向の石組水路、石列1・2、石列3・4が検出された。長さ約50cm～1m程度の自然礫や整形した礫を用いている。善光寺周辺の町割も兼ねた水路には現在でもこの石組が見受けられる。調査範囲中央付近には構築年代が不明だが近代と見られる井戸があり、その北側に石組遺構1号遺構が検出された。1号遺構の、井戸と対応する位置には一部石組が欠けた部分があり、井戸と繋がる構造になっていて水場遺構である可能性がある。井戸の南には東西方向の石列があり、この石列は3次面まで同位置に見られる。3次面では遺存状態が良好なため、石列の端部から北へ延伸が見られ、それに対応する石列が北西にも検出されている。この石列は1次面で構築された倉庫や土蔵の根石であると考えられる（建物跡1）。また調査区西端には地下室の一部が検出され、調査区外へ続くと見られる。調査区北東隅には褐色土が充填された方形土坑65号遺構があり、

番	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形	断面形	覆土	時期	備考
1	1号遺構	(0.50)	128	60~65	方形	方形	単層	藤末以降	井戸に付属する水場遺構か
1	2号遺構	44	28	12	楕円形	逆台形	単層		
1	3号遺構	56	48	16	楕円形	逆台形	単層	18世紀	肥前系染付瀬戸・美濃系向田
1	4号遺構	26	23	16	円形	方形	単層	18世紀	肥前系陶器・染付
1	5号遺構	34	33	38	円形	U字状	単層	18~19世紀	肥前系染付・複数小母型打成形陶器皿
1	6号遺構	30	27	14	円形	U字状	単層		
1	62号遺構	318	(72)	106	方形	方形カ	単層	藤末以降	石垣跡下室
1	建物跡1	330	260	—	方形	—	—		建物基礎柱石残存、石抜き取り痕
2	7号遺構	26	—	16	円形カ	U字状	単層	17世紀後半	
2	8号遺構	27	23	18	円形	U字状	単層	17世紀後半	
2	10号遺構	43	(12)	13	楕円形	半円形	単層		
2	11号遺構	33	32	8	円形	半円形	単層		
2	12号遺構	58	34	16	楕円形	圓状	単層		
2	13号遺構	34	26	15	楕円形	U字状	単層		
2	14号遺構	27	(16)	22	楕円形	U字状	単層		
2	15号遺構	32	22	22	方形	U字状	単層		
2	42号遺構	30	26	8	円形	U字状	単層		
2	43号遺構	34	30	40	円形	有蓋圓柱状	底面に櫛有		
2	44号遺構	22	19	44	楕円形	U字状	単層		土脚回
2	45号遺構	52	40	20	楕円形	U字状	単層		
2	46号遺構	34	29	33	円形	U字状	単層		
2	47号遺構	30	26	18	円形	U字状	柱頭有		土脚回、内耳溝
2	48号遺構	22	22	28	円形	U字状	単層		
2	49号遺構	21	14	10	方形	—	単層		
2	建物跡2	(310)	220	—	方形	—	—		建物基礎柱石残存、基礎内部黄色印入地埴輪
3	66号遺構	50	47	10	円形	—	単層		>30号遺構、調査時15号遺構付替え土脚回
3	16号遺構	36	35	12	円形	U字状	レンズ状、複層	15世紀	
3	17号遺構	32	27	15	楕円形	半円形	単層	15世紀	>28号遺構
3	18号遺構	20	18	31	円形	U字状	柱頭有	15世紀	>30号遺構
3	19号遺構	34	28	50	楕円形	圓状	単層		
3	20号遺構	26	24	12	円形	V字状	単層		
3	21号遺構	38	34	42	円形	U字状	単層		
3	22号遺構	44	36	26	円形	逆台形	単層	近世	
3	23号遺構	34	32	17	円形	U字状	単層	中世	
3	24号遺構	28	24	10	円形	逆台形	単層	中世	>32号遺構
3	25号遺構	90	88	21	円形	圓状	単層	15世紀後半	>30・31号遺構、土脚回
3	26号遺構	54	46	12	楕円形	圓状	単層		
3	27号遺構	36	34	20	円形	方形	単層		-=28号遺構
3	28号遺構	216	20~30	12~16	U字棒状	方形	単層		-=27号遺構
3	29号遺構	64	26	—	方形	圓状	単層		
3	30号遺構	(464)	50~78	12	楕状	圓状	単層	13~14世紀	<18・66・25・64号遺構、从軸陶器、手づくね土器 出、梁瓦、土脚回
3	31号遺構	(232)	60	30	椭状	逆台形	単層	15世紀後半	<64号遺構、土脚回、瓦器
3	32号遺構	250	70~90	22~24	椭状	圓状	単層	17世紀	<24号遺構、古代瓦、近世前半陶器
3	33号遺構	60	30	8	楕円形	圓状	単層	中世	
3	34号遺構	24	26	8	円形	U字状	単層		
3	35号遺構	54	—	38	円形	U字状	単層		>40号遺構
3	36号遺構	26	22	26	円形	U字状	単層		
3	37号遺構	34	32	10	円形	円形	単層		>38号遺構
3	38号遺構	36	34	10	円形	逆台形	単層		<37号遺構
3	39号遺構	1446	(78~136)	40	椭状	逆台形	単層	15世紀	<56~40・41号遺構
3	40号遺構	(550)	0~30~250	24	椭状	圓状	単層	15世紀	>39号遺構、<35・1号遺構
3	41号遺構	(286)	(110~180)	—	方形カ	底面まで掘削不可	単層	17世紀	>39・40号遺構、土脚回、瓦器、肥前系染付、窓口、美濃系陶器、京信楽系陶器など
3	50号遺構	65	51	15	方形	逆台形	底面に櫛有	中世カ	古代瓦、土脚回
3	51号遺構	110	96	13	円形	圓状	単層		
3	52号遺構	180	133	40	楕円形	圓状	レンズ状、複層	17世紀後半	皮繩
3	53号遺構	40	33	29	楕円形	U字状	単層	中世	土脚回
3	54号遺構	34	32	22	円形	U字状	単層	17世紀前半	
3	55号遺構	20	20	13	円形	U字状	柱頭有	中世	土脚回
3	56号遺構	30	26	18	円形	獨立状	柱頭有	中世	土脚回
3	57号遺構	31	38	29	楕円形	U字状	単層	中世	土脚回
3	58号遺構	44	38	14	楕円形	U字状	柱頭有		
3	59号遺構	28	22	—	楕円形	V字状	単層		
3	61号遺構	37	36	16	円形	U字状	複層		
3	63号遺構	56	55	28	円形	獨立状	単層		
3	64号遺構	58	48	12	楕円形	圓状	単層		
3	65号遺構	(248)	(170)	—	方形	底面まで掘削不可	単層	19世紀代	弘化4年(1847)火災の薺谷呂理坑赤褐色の覆土被熱により変色・変形した遺物
3	建物跡3	(240)	250	—	方形	—	—		建物基礎柱石残存、根石抜き取り痕

表2 遺構観察表

出土遺物の年代より弘化4年（1847）の大火の廃棄土坑と考えられる。出土した陶磁器は被熱したものが多く釉薬の変色や変形が見られる。また被熱した壁材なども出土した。

### （2）2次面

遺構分布は少なく、ビットが見られる程度であるが、調査区西壁中央付近で、径約10cm、長さ80cm前後の先端を鋭利に切削した木杭が集中して打込まれている部分が見られた。削平された部分もあり、その全体を把握することは出来ないが、南北1.2m、東西80cmの範囲に32本の杭が打込まれ、そのうち数本は紐により束ねられていた。目的は不明なもの、捨杭などの基礎地業などが推測される。65号遺構の南には、東西3m、南北2.3m規模の、周囲と覆土が異なる範囲が検出された。南東部は1号遺構により削平されている。覆土はやや細粒の均質な黄色砂であり、人為堆積の可能性がある。何らかの建物跡と考えられ、建物跡2とした。

### （3）3次面

17世紀代の検出面であるが、中世の遺構も確認された。最も旧いのは30号遺構で手づくね土器皿や土師器・須恵器が出土している。13～14世紀の遺構と判断した。南端に位置する溝状遺構39・40号遺構は15世紀代の所産である。出土遺物はほぼ同時期であるが、切合いにより39号遺構が旧いと判断した。39号遺構は東西に走行し、調査区外に続く。恐らくは八幡屋磯五郎大門町店地点で検出されているSDO1に接続していたと思われる。遺構断面形は逆台形で部分的に北側に中場が設けられ、木杭列も見られた。40号遺構は北岸は調査されたが南岸は調査区外のため、全体を把握することは出来なかった。両者は17世紀代の性格不明遺構、41号遺構により削平されている。41号遺構は調査した範囲では方形を呈する遺構と推測されたが、非常に深く、湧水があつたため完掘することが出来なかつた。覆土からは17世紀前半を主体とする土器・陶磁器類、木製品・金属製品などが出土したが、15世紀代の遺物も含まれ、39・40号遺構の遺物が混入していると考えられる。建物跡の可能性を指摘しておく。52号遺構は長軸1.8m、短軸1.33m、深さ40cmの土坑である。焼土・炭化物を多量に含む。17世紀前半～半ばの年代の陶磁器が出土した。1号遺構の下層において東西方向の石列が確認された。32・33号遺構は石列北西隅に接続し、南下する位置にあり、根石が埋設されていたと見られ、建物基礎と判断した（建物跡3）。32号遺構からは17世紀前半の肥前系陶器皿が出土している。

## 第3節 遺物

### （1）概要

古代の遺物は中世・近世の遺構に混入して出土し、ほとんどが小破片である。

中世遺物の年代は15世紀代が主体である。土器では在地の皿・内耳鍋、陶磁器は国産陶器である古瀬戸・大窓、中国産の青磁・白磁が出土した。また瓦器火鉢が3点出土しているが、竹風堂店点SK6でも出土しており、14世紀後半～15世紀の年代が示されている。土器皿は30号遺構で手づくね成形の製品が出土したが、他の土師器・須恵器とともに混入の可能性が高い。この他の土器皿はロクロ成形で、出土遺構は39・40号遺構に集中している。

近世以降は17世紀～20世紀までの遺物が出土している。陶磁器に関しては、全体として安価な大量生産品が主体であり、碗の比率も多い。しかし、一般集落や町屋では使用しないような大皿や器高が25cmになる花瓶が出土している。また組と思われる同一製品も散見し、調査区の南西に位置する本陣や参道に面した店などで使用されていた什器の廃棄も考えられる。遺物の分類・編年については、肥前系陶磁器は大橋康二氏（九州陶磁学会2000）、瀬戸・美濃系陶磁器は藤澤良祐氏、美濃焼の一部については黒ヶ根窯調査報告書（土岐市教委2006）、近

代瀬戸・美濃系陶磁器は長佐吉真也氏、越中瀬戸焼は宮田進一氏の編年を参照した。

## (2) 古代

30号遺構で土師器・須恵器の小片が出土しているほかは、造成土に混入していたと思われる古代瓦が見られる。

## (3) 中世

**土器皿** 手づくね成形が30号遺構から出土している。このほかはほぼロクロ成形で回転糸切されている。しかし口縁～体部の整形方法は分類ができる。①ロクロナデで口縁が外傾するように整形するタイプ、②口縁部を強くなるタイプ、③体部下間に横方向のケズリを施すタイプが出土している。これらロクロ成形の皿は器形などが15世紀代の特徴を示す。40号遺構では古瀬戸後期の天目碗・中国産白磁皿と共に伴っている点で年代が一致している。

**陶磁器** 40号遺構出土の中国産白磁皿は口縁端反、見込に印花文が施されている。廃土出土の龍泉窯青磁碗も見込に印花文が見られ、いずれも15世紀代と見られる。40号遺構の天目碗は口縁のくびれがありなく、体部の開きも僅かに内湾する程度で、古瀬戸後期II期、15世紀初めの製品である。3次面下層出土の83は体部内面に切込があるため鉢と見られ、体部の直線的な器形、口縁端部の内面突出がない点で、古瀬戸中IV期の製品と考えられる。

**瓦器** 41号遺構出土の火鉢(121)は外面口縁付近にスタンプによる菊花文が施文されている。1号遺構からは2点の火鉢が出土しており、41もスタンプによる印花文が施文される。42は体下部に雷文が見られる。いずれも出土遺構は近世であるが、遺物の年代は中世後期と考えられる。しかし中世瓦器については奈良火鉢など広域流通品以外は胎土・色調・器形など形態が多様で、地域色も豊かである。このため分類・編年は未だ進んでいない。北信地域でも同様であり、現状では在地火鉢が普遍的に存在する中世後期としか限定できない。

## (4) 近世

1～3次面を通じて、陶磁器が主体で皿・鉢が多いように見受けられる。10寸を超える大皿も出土しており、明らかに一般集落や町屋の陶磁器組成とは異なる。しかし18世紀の碗については肥前系波佐見窯の大量生産品が出土している。19世紀以降は瀬戸・美濃系磁器染付が比率を高めていく。器種としては小杯や碗が多く、角皿や神酒利など多様化している。全時期を通じて产地は肥前系の比率が高いものの、瀬戸・美濃系製品が17世紀前半に定量を占め、確実に美濃焼と判明した製品もある(54)。19世紀以降には磁器製品において瀬戸・美濃系の比率が高くなる。3次面が17世紀前半の時期を含むため、越中瀬戸焼が出土している。肥前系とともに日本海流通と北信地域の関係性が窺える資料である。

特殊な器種としては1次面出土の25が挙げられる。底部のみなので推測であるが中国から輸入される薬の容器の可能性がある。2次面で出土した61は肥前系溝縁皿であるが、通常は62のように単独の皿として生産地から出荷されるが、61は2枚の皿が接着した状態である。掲載外の遺物だが、瀬戸・美濃系の磁器小杯に赤色顔料を入れたものが1号遺構から出土した。小杯は近代以降の製品であるが、赤色顔料の用途は不明である。60は2次面で出土した猪口で、幕末頃の製品である。底面に「するがや□」という朱書がされている。朱書は焼継の際に焼継師が注文者名を記したものである。「するがや」については明治25年発行の『長野町勉強家一覧表』(図6)に広告が掲載されている。その広告によれば、するがや本店は「大門町上ノ角」とあり、支店は「横町大門ノ入口」とある。その表の他の部分に「大門町西側角ヨリ三軒目　するがや　鈴木小右衛門」



図6 長野町勉強家一覧

という広告も見られた。取扱商品が同じなので、同一店舗を指すのかもしれないが、不明である。いずれにしてもどのような経緯を経てか、するがやの所有品が廃棄されたのだろう。

41号遺構の123は中世の内耳鍋と比較して器高が低く、破片のため内耳の有無は確認できなかったが、共伴遺物の年代である17世紀前半の所産と考えられる。

### (5) その他

様々な遺物が出土しているが、瓦は近世の権瓦が多い。古代瓦は出土したものの量は少なく、近接する大本願明照殿地点とは様相が異なる。恐らくは古代以前の遺構の有無によると思われる。155～158は磁器や珠洲焼・土器片の側面を打ち欠き円形に近い形状に作られている。用途は不明ながら、砥石に見られる研磨痕もないため、遊具の可能性が高い。163は近代のガラス瓶であるが、無色透明・いかり肩という特徴は薬品瓶とされている（桜井2006）。気泡や底部の器厚の偏り（偏肉）は明治・大正期のガラス瓶に見られる特徴である。

石製品は石臼・五輪塔・宝鏡印塔が出土した。これらの大型石製品は廃棄土坑と推測される41号遺構に投棄されていたり、石列に使用されていた。石臼は全て粉挽臼である。石塔は殆どが五輪塔であるが、171は宝鏡印塔の中段の部位である塔身で、側面四方には金剛四界仏である「キリーグ（不動明王）」「ウーン（阿闍如來）」「アク（不空成就如來）」「タラーク（宝生如來）」の種字が刻まれている。172も形状は宝鏡印塔塔身であるが、四方に刻まれているのは全て「パン（大日如來）」の種字である。

金属製品は殆どX線撮影を行い、その63点中銭貨は23点である。寛永通寶が多く、中国銭の開元通寶や北宋銭の熙寧元寶・元祐通寶・至和通寶・天禧通寶が出土している。この他の金属製品は釘以外は不明なものが多く、家具や建具の部品と思われる。

木製品は湧水のあった41号遺構から出土した。何かの部材とは思われるが、掲載した2点以外は不明である。181は径24cm、厚さ0.8cmの曲物である。182も曲物で径14.8cm、厚さ1.2cmである。いずれも遺存状態は良くない。

## 第IV章　まとめ

今回の調査は、善光寺門前町跡では今まで調査されていない、小路に面した敷地で行われた。いわば参道という門前町のメインストリートではなく、一般的な町屋が並ぶ範囲であり、これまでの参道沿いの調査との比較検討が期待できるものである。中世では15世紀代の遺構・遺物が確認され、39・40号遺構で出土した土器皿については、改めて八幡屋穢五郎大門町店地SD01出土のものと比較検討した結果、製作技法・器形等が共通しており、同時期と判断した。中世後期の善光寺門前町の街並みについて、今回の調査で明らかにすることはできなかった。これまで西町遺跡では中世の構跡や堅穴建物跡が発見されているが、その他の門前町跡の地点などでは区画構が主な遺構となっている。今回の調査でも狭小な調査区であるために、遺構の性格を判断することが難しく、40号遺構については構跡の可能性を指摘したのみである。

幕末以降の建物配置としては竹風堂地点と共通点がある。通りから奥まった位置に井戸があり、更に奥に土蔵などが見られる点である。本調査区も近代の井戸が通りからは離れており、その奥に建物跡が検出された。西端の地下室は境界石組水路石列1・2を挟んでいるので、西隣の参道に面した敷地の施設と考えられるが、参道からは最も離れた位置になる。

出土した焼物は大量生産品を主体としながらも、径10寸を超える大皿や、17世紀前半には一般的な町人層が所有することが少ない器種である碗が見られ、この敷地の性格を考えるうえで重要な要素である。

各層は焼土・炭化物が多く混入しているため、火災後の整地層であると推定される。各層の出土遺物の年代を調査地の所在する横町での火災の記録に照合すると、元禄元年（1688）横町などでの火災、宝曆元年（1751）大本願と町屋一帯の火災、弘化4年（1847）の善光寺地震とその後の火災があり、それぞれ3次面から1次面に時期が重なる。調査地が火災後の廻芥処理として利用された敷地であることも想定できるが、各層に建物跡が検出されているため、空閑地とは考えにくい。つまり出土した遺物はこの敷地に由来するものであって、また焼物の組成は一般的な町屋と評価することができず、むしろ参道沿いの店舗や旅館などの敷地と解釈することができる。図5は慶応4年（1868）に官軍が北に進軍する際、善光寺宿である大門町に宿泊する時の宿の配置図である。本陣と記載されているのは、現在も大門町にある藤屋ホテルで、位置もほとんど変化していないと推測される。図ではその右隣（北側）に「わたや仁左衛門」と記され、文政10年（1827）に出版された『諸国道中商人鑑』中仙道・善光寺之部には「わたや仁左衛門 二王門前東かへより三軒目」とあり、この配置が少なくとも40年前まで遡ることがわかる。絵図に調査地を正確に重ねることは、難しいが大門町の角から南2軒と東2軒が調査地に当たるのではないだろうか。大正

14年の地図（図6）には御本陣であつた藤屋ホテルの北隣に山田小間物店と見える。昭和27年に八幡屋穢五郎大門町店が店舗を出店した位置である。今回の調査地はその隣の深沢洋品店とその東の丸田屋洋品店の位置である。18世紀前半には藤屋が宿として大門町で開業しており、そのころに

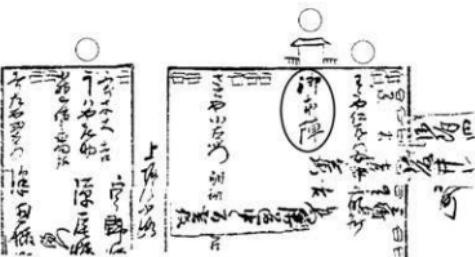


図5 小林計一郎 1994に加筆

は大門町の宿で本陣を持ち回りしていた。調査地はこれら宿の裏手や隣接する敷地であり、出土遺物に見られる傾向はこの立地に由来するのである。

今回の調査では調査地の土地利用について、完全には解明できなかった。今後このような小路での調査事例が増加することにより、参道からでは分からぬ中世の善光寺門前町が解明されることを期待したい。



図6 大正14年4月長野市略図並商工業案内  
(元善町誌編集委員会 1980) に加筆

表3 出土土器・陶磁器觀察表(1)

## 出土器・陶器器類表(2)

用器 No.	出土位置	種別	質	保存状 態	口径[cm]	底径[cm]	高さ[cm]	色調	施 索	文様・その他特徴	推定地	推定年代	備考
外: 帽文	内: 横縞												
42	1号墳	直筒	火拂(6枚)	底部1/8	—	15.9	18.3	205.70	褐灰	に引いた細い白線の模様	外: 帽文	山世	
43	1号墳	直筒	土	底部1/8	10.0	6.3	17.8	11.7	5.4	84.44	内: 引いた模様	外: 帽文	山世
44	62号墳	直筒	土	底部1/4	11.10	11	7.4	5.4	5.4	84.44	内: 引いた模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
45	62号墳	直筒	土	底部	1/3	8.7	2.0	—	40.18	白	内: ドラス入	内: 人字コバルト	ナガミカミ(4代)~ 20(1/48)
46	62号墳	直筒	土	底部	3/4	18.4	2.9	11.2	206.12	灰白	内: ドラス入	内: 人字コバルト	ハタケ(4代)~ 18(1/48)
47	62号墳	直筒	土	口縁1/2	22.9	5.0	—	54.03	青白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)	
48	65号墳	直筒	土	底部1/6	15.0	7.6	9.1	34.69	灰白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)	
49	65号墳	直筒	土	底部1/4	—	16.3	17.2	41.51	オリーブ	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)	
50	65号墳	直筒	火拂	火拂1/4	10.6	5.9	—	9.12	白	内: ドラス入	内: 人字コバルト	天保2年(1831~1850)	
51	65号墳	上圓	ミニチュア	穴形	2.3	1.3	1.9	2.74	—	内: 黄	外: 地白模様	輪花紋	天保2年(1831~1850)
52	65号墳	上圓	直筒	火拂	火拂1/2	6.5	4.2	14.26	青白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)	
53	65号墳	上圓	直筒	火拂	火拂1/2	—	2.9	3.0	31.04	青白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
54	65号墳	上圓	直筒	火拂	火拂1/2	6.5	4.6	15.04	青白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)	
55	65号墳	上圓	直筒	火拂1/2	2/3	11.3	7.1	47	180.06	白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
56	65号墳	上圓	直筒	火拂1/2	2/3	10.8	6.6	4.3	21.53	白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
57	65号墳	上圓	直筒	火拂1/2	3/4	11.8	8.1	50	367.29	白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
58	65号墳	上圓	直筒	火拂1/2	3/4	11.4	7.1	4.7	348.37	白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
59	65号墳	上圓	直筒	火拂	火拂1/2	11.8	3.1	7.5	48.02	内: 黄、外: 白色模様	内: 黄	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
60	2・368	直筒	直筒	直筒1/1	—	—	—	19.98	灰白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)	
61	2・368	直筒	直筒	直筒1/1	—	12.1	4.2	52.53	オリーブ	上半部模様下に云状 模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)	
62	2・368	直筒	直筒	直筒1/2	2/3	11.2	2.1	3.8	75.24	オリーブ	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
63	2・368	直筒	直筒	直筒1/2	2/3	9.5	1.4	4.6	28.04	白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
64	2・368	直筒	直筒	直筒1/2	2/3	8.0	2.2	4.2	13.78	白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
65	2・368	直筒	直筒	直筒1/2	2/3	9.2	1.9	4.9	13.69	内: 黄、外: 白色模様	内: 黄	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
66	2・368	直筒	直筒	直筒1/2	—	14.0	4.9	115.37	模様	内: 黄	外: 帽文	天保2年(1831~1850)	
67	2・368	直筒	直筒	直筒1/2	12.7	11.7	—	8.19	内: 黄、外: 白色模様	内: 黄	外: 帽文	天保2年(1831~1850)	
68	2・368	直筒	直筒	直筒	—	5.8	1.3	2.3	62.14	灰白	内: 白模様	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
69	3瓶	直筒	直筒	直筒	1/4	10.0	2.7	5.8	36.00	内: 黄、外: 白色模様	内: 黄	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
70	4号	直筒	直筒	直筒	1/4	7.2	3.3	5.7	34.80	内: 黄、外: 白色模様	内: 黄	外: 帽文	天保2年(1831~1850)
71	3瓶	直筒	直筒	直筒	—	14.4	4.6	95.96	黒白	内: 白模様	外: 下部模様	天保2年(1831~1850)	
72	3瓶	直筒	直筒	直筒	—	14.4	5.0	100.97	黒白	内: 白模様	外: 下部模様	天保2年(1831~1850)	
73	3瓶	直筒	直筒	直筒	—	13.2	4.8	78.50	黒白	内: 白模様	外: 下部模様	天保2年(1831~1850)	
74	3瓶	直筒	直筒	直筒	—	14.0	4.6	69.94	黒白	内: 白模様	外: 下部模様	天保2年(1831~1850)	
75	3瓶	直筒	直筒	直筒	—	14.3	4.9	91.22	黒白	内: 白模様	外: 下部模様	天保2年(1831~1850)	
76	3瓶	直筒	直筒	直筒	—	14.5	3.4	57.80	黒白	内: 白模様	外: 下部模様	天保2年(1831~1850)	
77	3瓶	直筒	直筒	直筒	1/5	11.9	2.5	7.6	19.87	灰白	内: 黄	外: 帽文	天保2年(1831~1850)

出土器・陶器器物表(3)

器種 No.	社名	種別	器種	保存状 態	直徑 mm	高さ mm	重量 g	色調	胎 土	施 華	文様・その他の特徴	発見地	推定年代	備 考	
78 366	陶器	壺	口縁1/4	31.6 44.3	—	59.32	青白	有孔隙無白色 輪廓線有輪孔	灰褐色 外表面有 輪廓線	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1650~1600	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
79 366	陶器	壺	底1/2	—	6.28	7.6	197.41	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
80 366	陶器	壺	底1/3	13.8	3.2	5.6	107.75	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
81 366	陶器	壺	底1/3	10.7	3.3	5.8	88.47	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
82 366	陶器	壺	底1/3	14.3	2.8	6.0	81.47	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
83 366	陶器	壺	底1/2	12.90	7.0	—	11.28	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
84 713	陶器	壺	底1/2	11.7	6.9	4.5	112.81	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
86 251	陶器	壺	底1/3	11.4	6.6	4.5	106.56	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
87 301	陶器	壺	底1/2	11.6	8.6	1.9	—	11.31	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕
88 319	陶器	壺	底1/4	9.4	2.5	6.1	18.81	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
89 319	陶器	A28 不明	長6.0 (3.6)短6.3	短6.3	—	17.87	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕		
90 321	陶器	壺	底1/4	—	6.5	11.0	348.95	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
91 360	陶器	壺	口一体部1/6	7.7	1.9	4.2	6.48	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
92 360	陶器	壺	底1/2	11.9	3.5	6.1	155.27	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
93 360	陶器	壺	底1/2	11.3	2.2	7.0	12.76	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
94 361	陶器	壺	底1/3	—	6.1	7.8	58.74	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
95 360	陶器	壺	底1/4	—	6.0	4.4	43.27	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
96 360	陶器	壺	底1/2	—	6.2	3.7	49.04	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
97 360	陶器	壺	底1/10	—	6.2	11.4	252.31	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
98 360	陶器	壺	底1/2	—	6.0	2.2	106.06	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
99 360	陶器	壺	底1/2	8.6	0.2	—	4.96	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
100 402	陶器	壺	底1/2	5.4	2.1	3.5	15.85	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
101 401	陶器	壺	底1/2	6.3	1.9	3.5	25.60	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
102 401	陶器	壺	底1/2	6.2	2.1	3.1	25.17	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
103 401	陶器	壺	底1/2	6.9	1.9	4.2	30.75	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
104 401	陶器	壺	底1/2	6.9	2.2	7.0	28.67	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
105 401	陶器	壺	底1/2	12.4	3.4	9.8	70.44	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
106 401	陶器	壺	底1/2	12.2	3.3	7.7	34.20	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
107 401	陶器	壺	底1/2	—	11.8	8.0	49.47	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
108 401	陶器	壺	底1/2	12.0	6.4	—	41.57	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
109 411	陶器	壺	口~底1/7	12.2	3.0	5.2	50.00	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
110 411	陶器	壺	底1/4	—	6.2	6.9	58.24	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
111 411	陶器	壺	底1/4	—	6.0	6.4	38.75	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
112 411	陶器	壺	底1/2	—	6.0	2.4	19.00	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
113 411	陶器	壺	底1/2	7.8	1.8	6.0	90.51	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
114 411	陶器	壺	底1/2	8.5	2.6	5.4	16.12	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
115 411	陶器	壺	底1/2	11.5	3.0	5.0	173.90	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
116 411	陶器	壺	底1/2	13.9	1.0	1.0	10.06	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
117 411	陶器	壺	底1/2	13.9	0.9	1.0	10.36	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
118 411	陶器	壺	底1/2	15.7	3.9	0.4	28.28	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	
119 411	陶器	壺	底1/2	23.0	4.0	—	34.49	青白	灰褐色 外表面有 輪孔	體外系 下部・足込部有 輪孔	大根田町1610~1650	施輪痕	大根田町1610~1650	施輪痕	

## 出土土器・陶器器類原表(4)

No.	出土地點	種別	器種	残存率	口径(cm)	直徑(cm)	高さ(cm)	重量(g)	色調	内面	外縁	文様・そり形跡	堆定地	確定年代	備考	
120	41号遺跡	陶器	火入	口16.16 底3.7	13.7 2.7	—	—	13.36 6.01	灰白	田字格縦目 灰白色(中)黑色。	内面磨痕	内面系	大體判明(1650~1600)	—	—	
121	41号遺跡	火鉢	火鉢	口14.1/12	26.0	51.0	—	64.04	灰黄	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	大體判明(1650~1600)	内面スズ付器	—	
122	41号遺跡	土器	内面窓	口14.0/12	24.8	44.4	—	43.21	黑	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	1.5代	—	—	
123	41号遺跡	土器	内面窓	底15.1/6	30.0	7.1	28.3	204.91	黑	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	1.5代	—	—	
124	41号遺跡	土器	内面窓	底15.1/10	36.0	8.0	—	190.46	灰白(中)黑色 灰白色	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	1.5代	—	—	
125	52号遺跡	土器	内面窓	底15.1/6	7.0	7.2	4.7	7.84	白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	1.5代	—	—	
126	52号遺跡	土器	内面窓	底15.1/6	10.3	2.9	—	—	灰白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	1.5代	—	—	
127	52号遺跡	土器	内面窓	底15.1/4	10.8	7.0	4.1	132.42	灰白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	大體判明(1610~1630)	内面スズ付器	—	
128	52号遺跡	土器	内面窓	底15.1/4	—	0.8	—	—	灰白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	大體判明(1610~1630)	内面スズ付器	—	
129	52号遺跡	土器	内面窓	底15.1/12	2.9	6.0	4.4	—	灰白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	大體判明(1610~1630)	内面スズ付器	—	
130	52号遺跡	土器	内面窓	底15.1/2	33.8	13.6	13.0	126.03	白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	大體判明(1610~1630)	内面スズ付器	—	
131	52号遺跡	土器	内面窓	底15.1/4	7.6	7.8	0.3	120.64	灰白(中)灰 灰白色	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	大體判明(1610~1630)	内面スズ付器	—	
132	52号遺跡	土器	内面窓	底15.1/4	10.2	6.5	2.9	—	116.14	灰白(中)灰 灰白色	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	大體判明(1610~1630)	内面スズ付器	—
133	54号遺跡	陶器	天輪	口14.6	13.1	4.8	—	—	20.33	黑	内面磨痕 灰白色	内面系	大體判明(1610~1630)	天輪	—	
134	1-2号土器	罐	罐	口14.6	2.3	8.8	4.9	3.4	110.70	灰白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	大體判明(1610~1630)	内面スズ付器	—
135	1-2号土器	罐	罐	口14.6	1.5	9.8	3.4	3.7	20.33	灰白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	大體判明(1610~1630)	内面スズ付器	—
136	1-2号土器	土器	底部1/4	—	0.17	4.7	35.82	白	粗白(中)白	粗白(中)白	粗白(中)白	粗白(中)白	在地	不明	不明	
137	2-3号土器	罐	罐	口14.6	—	0.10	4.2	94.36	黑	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	大體判明(1610~1630)	内面系	—	
138	3号土器	土器	底部1/8	1/4	10.8	3.0	5.4	25.80	浅灰	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	1.5代	—	—	
139	3号土器	土器	底部1/8	22.1	12.4	—	145.11	灰白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	1.5代	—	—		
140	3号土器	土器	底部1/8	24.6	7.4	—	123.75	灰白(中)白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	1.5代	—	—		
141	トレンチ	土器	不明	小片	—	—	—	—	灰白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	1.5代	—	—	
142	窓なし	土器	底部	—	7.5	20.2	5.5	176.17	灰白(中)灰 灰白色	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	1.5代	—	—	
143	窓なし	土器	底部	口14.6	10.8	6.2	3.7	150.06	白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	2.4代	—	—	
144	窓なし	土器	底部	口14.6	5.0	5.6	2.9	63.19	白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	2.4代	—	—	
145	窓なし	土器	底部	口14.6	5.1	3.0	1.9	27.72	白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	2.4代	—	—	
146	窓なし	多角	口14.6	11.3	2.8	4.6	30.74	白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	2.4代	—	—		
147	窓なし	路	口14.6	17.2	4.2	—	369.50	灰白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	2.4代	—	—		
148	窓なし	水甕	口14.6	3.5	8.1	0.0	118.89	灰白	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	2.4代	—	—		
149	路	水甕	口14.6	2.7	7.8	—	117.49	綠色	内面磨痕 灰白色	内面系	内面系	2.4代	—	—		

表 4 石製品觀察表

規 則 No.	出土位置	分類	材質	法量(mm)			重量(kg)	残存率	備 考	編 號	
				A	B	C					
164	石列1・2	粉砕臼	安山岩	37.2	12.2	5.2	13.30	1/2	上臼1.6分面左回し.側方打込み後手手.中央穴未貫通		
165	石列1・2	粉砕臼	安山岩	34.5	13.4	6.7	15.40	1/2強	上臼左回し.側方打込み後手手.中央穴未貫通.磨滅度重い		
166	41号遺構東手	粉砕臼	安山岩	32.4	10.6	5.8	7.25	1/2	下臼1.6分面左回し		
2・3面南	トレンチ	粉砕臼	安山岩	30.0	8.8	1.9	3.75	1/3	上臼1.6分面左回し.側方打込み後手手.中央穴未貫通		
168	52号遺構	砾石	頁岩	5.9	(9.7)	19.7	263.15kg	不明	織方向線状痕多.側面車歯3次面輪出と複合		
169	3次面トレ ンチ	砾石	頁岩	6.1	1.6	(9.3)	140.45kg	不明			
170	52号遺構	輕石	輕石	4.5	2.0	(4.0)	14.43kg	不明	浅顯山溶岩		
171	石列1・2	宝慶田堵	安山岩	15.0	13.6	15.5	5.40	4/5	塔身4面に梵字「金剛界西方仏」 塔身4面に梵字「アバ（大光明如来）」		
172	南端石列	宝慶田堵	安山岩	15.3	12.0	15.0	5.35	ほぼ完形			
—	石列1・2	五輪塔	安山岩	25.6	15.0	25.0	12.80	1/1	火輪		
—	石列1・2	五輪塔	安山岩	21.7	13.0	22.0	7.85	ほぼ完形	火輪		
—	41号遺構東手	五輪塔	安山岩	15.8	19.5	13.1	5.10	1/1	空腹輪		
—	41号遺構東手	五輪塔	安山岩	24.7	16.2	24.4	10.40	4/5	火輪一部焼熱		
—	41号遺構東手	五輪塔	安山岩	15.1	17.6	(11.9)	2.05	3/4	空腹輪痕.輪面に凹有		
—	41号遺構東手	粉砕臼	安山岩	(13.4)	9.5	6.5	2.60	1/1	上臼1.6分面左回し.側方打込み後手手.中央穴未貫通		
—	41号遺構東手	五輪塔	安山岩	(9.8)	12.4	10.3	1.25	4/5	空腹輪.輪面に凹有		
—	西端石列	五輪塔	安山岩	21.6	15.1	—	7.10	ほぼ完形	火輪上部中央に凹み		
2・3面南	トレンチ	五輪塔	安山岩	19.5	10.5	19.7	5.90	ほぼ完形	火輪一部焼熱		
—	2・3面南	トレンチ	石砾カ	21.0	15.7	14.5	8.25	不明	小片のため分類不明		
—	2・3面南	トレンチ	五輪塔	安山岩	19.4	13.3	—	7.10	ほぼ完形	水輪上部中央に浅い凹み	
—	トレンチ	五輪塔	安山岩	13.2	12.6	—	2.57	4/5	空腹輪.風輪に浅い凹み		
—	東2次曲	五輪塔	安山岩	23.5	14.2	22.8	8.65	7/8	火輪		
—	東2次曲	五輪塔	安山岩	22.2	12.9	21.5	8.05	ほぼ完形	火輪前面部に小穴有		
—	東3次曲	五輪塔	安山岩	20.8	15.1	20.0	11.50	ほぼ完形	地輪上面中央に浅い凹み		

表 5 金屬製品觀察表(1)

規 則 No.	出土位置	分類	材質	法量(mm)			重量(g)	残存率	備 考	A長さ・外径 B幅・内径 C厚さ	編 號
				A	B	C					
62号遺構	釘カ	鉄	(29.1)	5.1	4.3	2.03					1
62号遺構	釘	鉄	(35.5)	5.5	5.5	2.32					2
1号遺構	鍛鉄	鉄	28.3	6.2~10.3	1.3	4.96	完形	新舊水道寶4文銘.1768年~			6
1号遺構	鍛鉄	鉄	22.9	5.9	1.3	2.76	完形	新舊水道寶1文銘.1668年~			7
1号遺構	不明	鉄	17.2	2.2~5.3	1.4~5.6	25.55	完形				9
173号遺構	不明	鉄	12.5	5.3~7.0	5.5~11.2	18.30	完形	片端面缺			10
1号遺構	所釘	鉄	85.5	7.7~15.3	12.9~16.5	27.13					11
174号遺構	不明	鉄	61.9	6.3~10.9	5.8~7.8	15.18					12
1号遺構	鍛鉄	鉄	21.7	6.1	1.2	2.38	完形	新舊水道寶1文銘.1668年~			13
1号遺構	鍛鉄	鉄	23.6	5.7	1.7	1.66	1/2	新舊水道寶1文銘.1668年~			14
175号遺構	所釘	鉄	35.9	3.0~11.1	2.0~8.7	4.17					15
176号遺構	所釘	鉄	101.3	13.8	12.9	25.31					16
177号遺構	不明	鉄	105.4	5.3~13.6	5.3~20.9	6.57					17
41号遺構	不明	鉄	91	16.8	7.4	22.15					18
41号遺構	鍛鉄	鉄	24.5	5.5	1.4	3.51	完形	古賣水道寶1文銘.1636~1656年			19
41号遺構	鍛鉄	鉄	24.5	6.8	1.2	2.58	完形	熊本元賣.直賣.北宋1068年			20
178号遺構	鍛金丸鉢	金	64.1	33.6	2.1	6.57			3か所留め具.数の数からは本来4カ所で固定		21
52号遺構	不明	鉄	(58.6)	12.4	6.1	9.15					22
52号遺構	鍛鉄	鉄	23.3	6.5	1.2	2.47	完形	新舊水道寶1文銘.1668年~			23
60号遺構	不明	鉄	109	3.4~7.4	2.5~8.2	12.40					25
1次面	鍛鉄	鉄	24.8	6.5	1.2	1.52	完形	開口通寶.唐621年~			26
1次面	鍛鉄	鉄	24.5	5.8	1.5	3.20	完形	元通寶.行寶.北宋1068年~			27
179号遺構	不明	鉄	11	6.6	0.7	0.56					28
1次面	鉄	鉄	143	4.2~10.4	6.1~9.3	49.35					30
2次面	不明	鉄	68.1	2.7~7.3	3.7~9.5	4.14					32
2次面北手	釘	鉄	58.6	3.3~5.8	2.6~5.8	5.28					33
180号遺構	鍛鉄	鉄	74.2	8.7	3.6	8.89	完形	吸口18c.後半以降			35
3次面	鍛鉄	鉄	23.6	7.2	1.1	2.42	完形	開口通寶.唐21年~			36
3次面	鍛鉄	鉄	22.2	6.9	1.0	2.14	完形	賣水道寶.文銘			37
3次面	鍛鉄	鉄	24.8	7.1	1.3	3.92	完形	至和通寶.直賣.北宋1054年~			39
南西トレ ンチ2底下層	不明	鉄	(85.5)	8.9	6.2	11.32					41
北トレ ンチ2底下層	不明	鉄	(150)	13.7	2	17.56					42
木柄鉤	鍛鉄	鉄	28.3	6	1.5	4.62	完形	新舊水道寶4文銘.胥11面.1768年~			43
木柄鉤	鍛鉄	鉄	23.7	6.1	1.3	2.98	完形	新舊水道寶1文銘.1668年~			44
木柄鉤	鍛鉄	鉄	25.3	5.2	2.4	3.13	完形	新舊水道寶1文銘.1668年~			45
木柄鉤	鍛鉄	鉄	24.7	6.9	1.1	1.46	完形	新舊水道寶1文銘.1668年~			46
3次面トレ ンチ	鍛鉄	鉄	22.5	7.1	1.0	1.53	完形	新舊水道寶.文銘.1668年~			47
東1次曲	不明	鉄	43.2	1.7~3.7	1.1~4.4	1.92			中央付近3条の沈縫々		52

金属製品観察表(2)

編號 No.	出土位置	分類	材質	法量(cm)			重量(g)	既存率	備考	A長さ・外径B幅・内径C厚さ			撮影 No.	
				A	B	C								
東1次面	鉄貨			25.5	6.7	1.2	3.58	完形	天祐通寶・北宋1017年~				54	
東1次面	鉄貨			25.7	4.9	2.2	4.11	完形	古寶永通寶・文政1636~1656年				55	
東1次面	鉄貨			25.5	3.6	2.9	3.50	完形	古寶永通寶・文政1636~1656年				57	
鹿丸	釘カ	銅	38.2	7.3~10.4	5.5~9.4	4.29								59
麻生	鉄貨			28.2	6.2	1.4	5.10	完形	新寶永通寶・文政11或1768年~				60	
麻生	鉄貨			24	6.5	1.3	2.73	完形	新寶永通寶・文政1668年~				61	
試標	鉄貨			28	7.1	1.3	4.10	完形	新寶永通寶・文政11或1768年~				63	

表6瓦・土製品・ガラス観察表

編號 No.	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm)			重量(g)	色調	胎土	備考	撮影 No.		
					長さ	幅	厚さ							
150	32号遺構	古代瓦	平瓦	小片	10.0	12.5	2.3	401.72	褐灰	小禮・赤色粒・砂粒	凸面側印押し・凹面側面取			
151	52号遺構	古代瓦	平瓦	小片	8.8	8.0	1.9	176.27	禮	粗粒・赤色粒	凸面側印押し・凹面側面取			
152	19号遺構	近世瓦	軒平瓦	瓦当片	10.0	12.5	2.3	167.37	褐灰	灰・赤色粒・白色粒・小禮	瓦当片・凹面側面取			
153	52号遺構	瓦	磚石	小片	5.8	3.0	1.7	55.60	黃灰	黃灰・黑色粒	軒用磚石			
154	南トレン 子	土製品	窓口		9.4	直径8.1	孔径2.7~3.4	379.70	灰・白・黃褐色	にぶい・黄褐色・白色粒	外壁面・内子口被熱により黒化・致冷付着			
155	41号遺構	磁器	玩具	完形	2.0	1.9	0.65	3.34	灰白	灰白・精良	染付・只張外周打と欠き転用			
156	33号面	土瓶	玩具	完形	3.5	3.0	0.75	9.49	褐灰	にぶい・禮・砂粒	外周全打ち欠き転用			
157	41号遺構	珠油池	不明	完形	4.6	4.2	1.5	35.02	灰	灰白色	状物質	外壁平行印押・外周打と欠き転用		
158	39号遺構	瓦	不明	完形	5.8	5.4	2.0	68.52	褐灰	灰・禮・粗	外周打と欠き転用			
159	石門1・2	土製品	脊石	完形	62.65	6.65	2.33	2.33	灰黄					
160	龍鳳	貝製品	脊石	完形	—	直径2.15	0.5	3.16	灰白					
161	1次面	ガラス 製品	おはじき	完形	—	直径1.65	0.5	2.03	淡緑			透明・気泡物		
162	2・3北ト レンジ	ガラス 製品	おはじき	完形	—	直径1.4	0.2~0.35	1.11	青紫			上面中央円形像・透明・気泡物		
163	複乱	ガラス 製品	瓶	完形	口径2.1	7.4	底径2.8	39.48	透明			型使用・側面に合わせ目あり・気泡・底面偏肉		

表7 掲載外土器・陶器類観察表

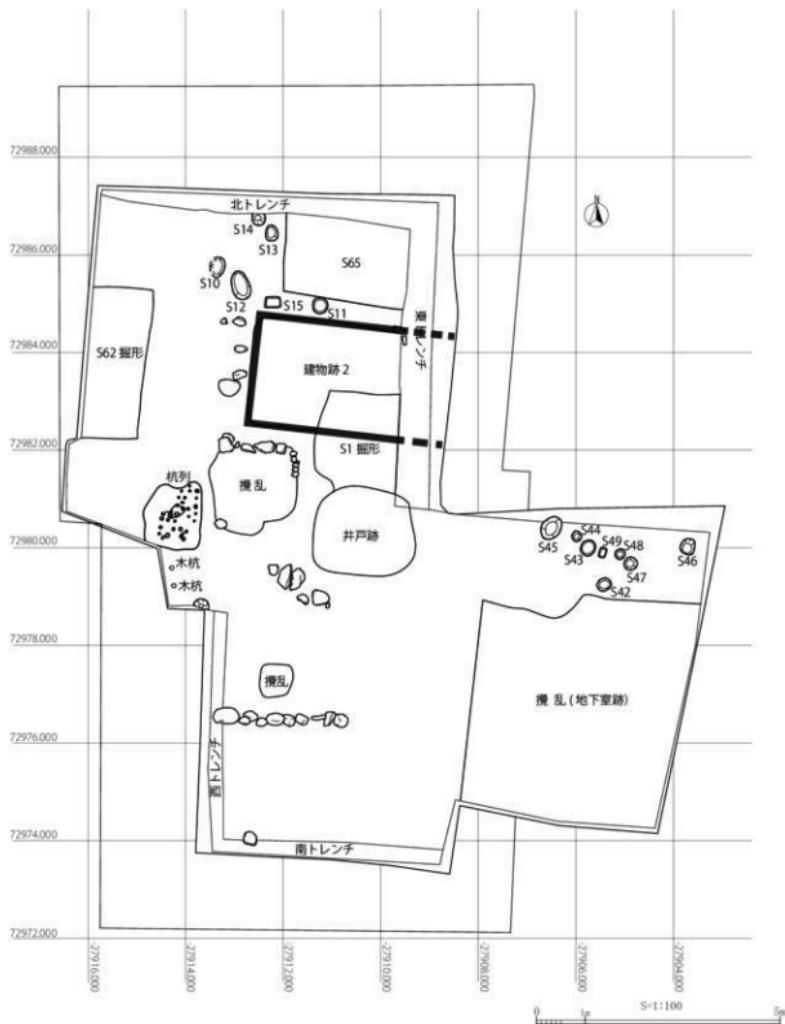
出土 位置	種別	推定產地	器種・点数	
			器種	点数
1次面	土器	在地	曲6.内耳5.火鉢1.手印18	
	陶器	肥前系	碗18.5.直1.直1.火鉢1.袋物1	
	陶器	瀬戸美濃系	碗29.直1.脚附3.盆1.袋物4.不明2	
	磁器	不明	碗1.急落4.不明1	
	陶器	脚中腹1.燒	曲2	
	磁器	肥前系	碗59.小杯3.直10.鉢2.直2.袋物9.不明4	
	陶器	瀬戸美濃系	碗8.直1.直物2.香炉1	
	磁器	不明	急落3.不明2	
	土器	不明	碗2.直2.香炉1	
	土器	在地	直2.火鉢1	
2次面	土器	在地	直41.内耳5.火鉢4.不明1	
	陶器	更衣系	直3.鉢1	
	陶器	瀬戸美濃系	碗6.直2.鉢1	
	磁器	不明	小明1.云母2	
	陶器	肥前系	碗8.小杯1.直1.直1.直2.袋物1.香炉香炉1	
	陶器	瀬戸美濃系	碗9.直1.直2.袋物1.不明2	
	瓦器	不明	火鉢1	
2・3次面	青磁	不明	瓶1	
	土器	在地	曲2.内耳5.直1	

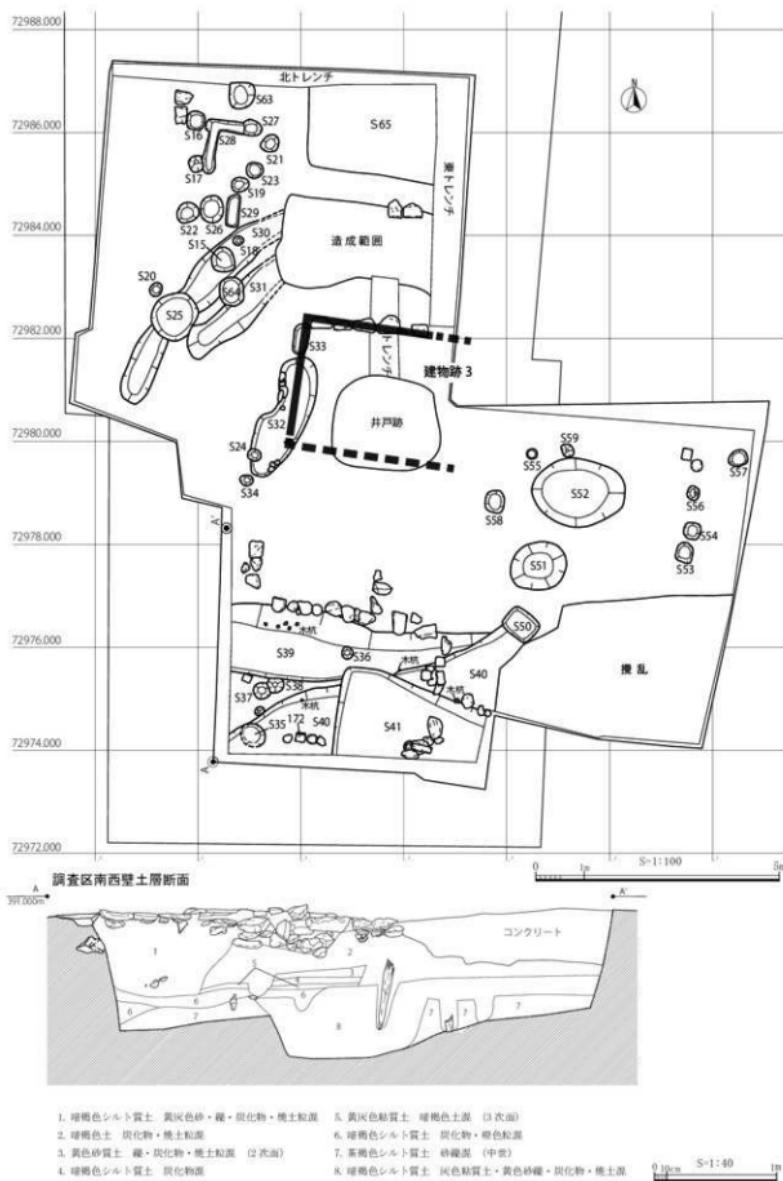
出土 位置	種別	推定產地	器種・点数	
			器種	点数
3次面	陶器	肥前系	碗1	
	陶器	瀬戸美濃系	碗1	
	磁器	不明2.直1	直1	
	陶器	瀬戸美濃系	碗1	
	土器	在地	皿68.不明47.サ子1.内黒1	
	陶器	肥前系	碗27.直15.直15.直3.鉢1.袋物3.香炉1.不明2	
	陶器	瀬戸美濃系	碗6.直5.直3.袋物1	
	立信多楽	直2		
	陶器	脚中腹1.燒	直1	
	磁器	不明	袋物1.土瓶1.不明7	
3次面下層	陶器	肥前系	碗33.小杯3.直4.直2.直3.袋物7.香炉9.青磁1.白磁1.直1.青磁1	
	磁器	不明	直2	
	青磁	不明	碗3.直1	
	瓦器	不明	焼瓦10.古代直7	
	白磁	不明	直1	
3次面下層	瓦器	不明	火鉢2	
	磁器	肥前系	直1	

## 参考文献

- 愛知県 2007『愛知県史』別編 黑業2 中世・近世瀬戸系
- 江戸遺跡研究会 2001『図説・江戸考古学研究事典』柏書房
- 大橋康二 1988「18世紀における肥前磁器の銘款について」『青山考古』6号
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 小林計一郎 1994「古人の想いに包まれて」『藤屋御本陣』
- 桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2006『江戸時代のやきもの』
- 全国シンポジウム実行委員会 2005『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』
- 全国シンポジウム実行委員会 2005『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』
- 土岐市教育委員会 2006『窯ヶ根窯発掘調査報告書』
- 水井久美男 2002『中世出土鉢の分類図版』高志書院
- 長佐古真也 2012「消費地から見た瀬戸・美濃窯へご飯茶碗を中心～」『平成23年度財團法人瀬戸市文化振興財團シンポジウム 瀬戸美濃窯の近代一生产と流通～』
- 長野市教育委員会 1998『長野遺跡群 西町遺跡』長野市の埋蔵文化財第87集
- 長野市教育委員会 2006『長野遺跡群 善光寺門前町跡』長野市の埋蔵文化財第115集
- 長野市教育委員会 2008『長野遺跡群 元善町遺跡 善光寺門前町跡(2)』長野市の埋蔵文化財第121集
- 長野市教育委員会 2014『長野遺跡群 善光寺門前町跡(3)』長野市の埋蔵文化財第135集
- 元善町誌編集委員会 1980『善光寺門前町百年の歩み 長野市元善町誌』
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窓の研究』高志書院
- 堀内秀樹 2010「都市江戸における貿易陶磁器の消費－江戸の需要とその背景－」江戸遺跡研究会編『都市江戸のやきもの』
- 水澤幸一 1999「瓦器、その城館的なるもの－北東日本の事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集
- 宮田進一 1988「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号
- 村上伸之 1999「肥前における明・清磁器の影響」『貿易陶磁研究』No.19
- 室賀明 1984『八幡屋磪五郎の七味唐がらし』



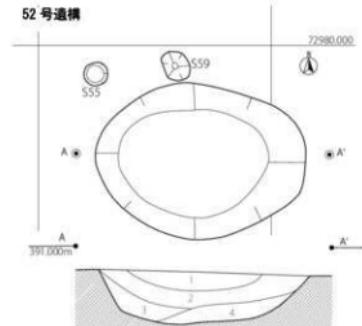




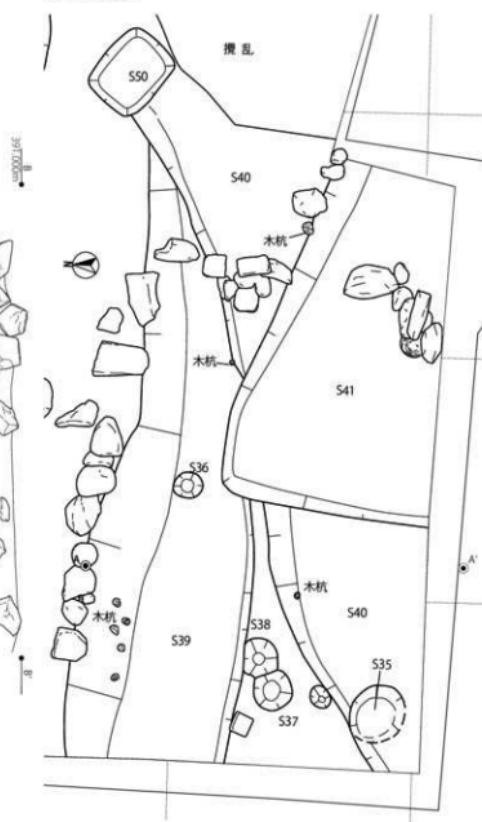
62号造構



52号造構



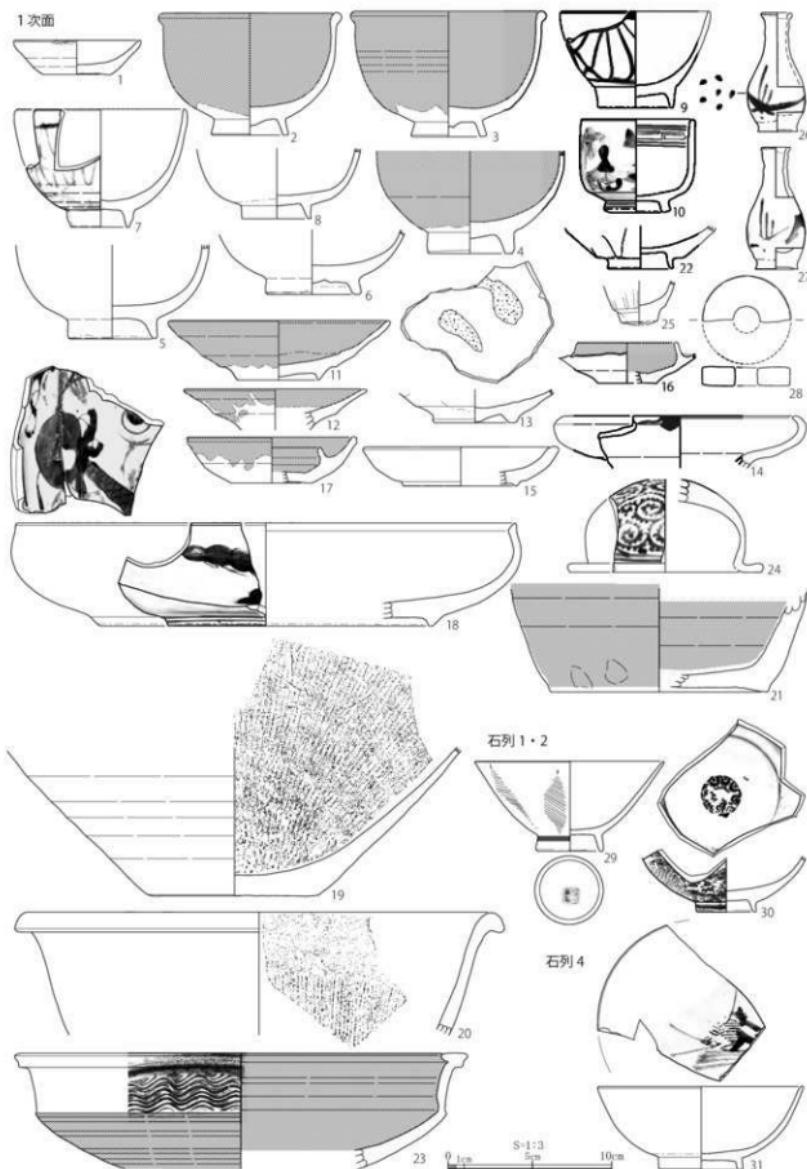
39・40号造構



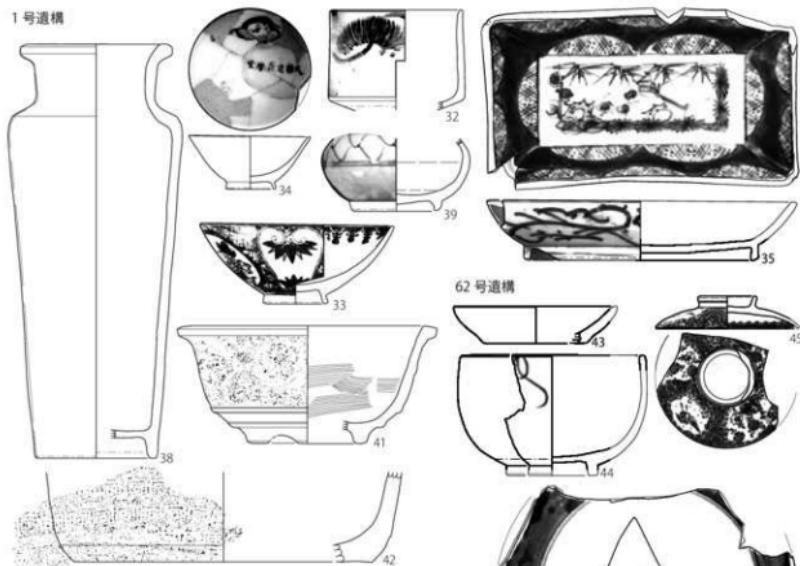
1. 喀褐色シルト質土 黄色砂多混、繊・炭化物・燒土少混
2. 喀褐色シルト質土
3. 灰色粘質土 白色砂質土層状体積
4. 喀褐色シルト質土 黄色砂多混、繊・炭化物・燒土少混

1. 喀褐色土 黄色砂・燒土・炭化物混
2. 炭化物層 燃土混
3. 燃土層 炭化物混
4. 喀褐色土 黄色砂・燒土・炭化物混

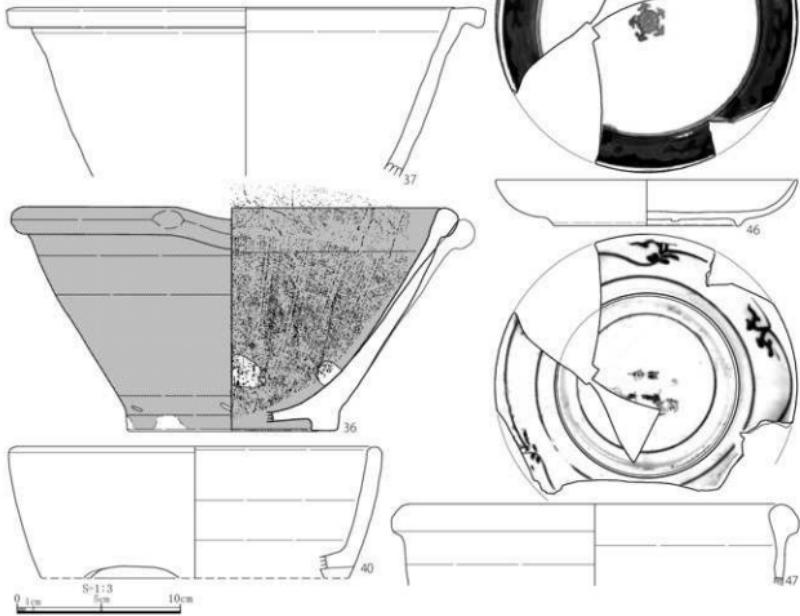
0.10cm S=1:40

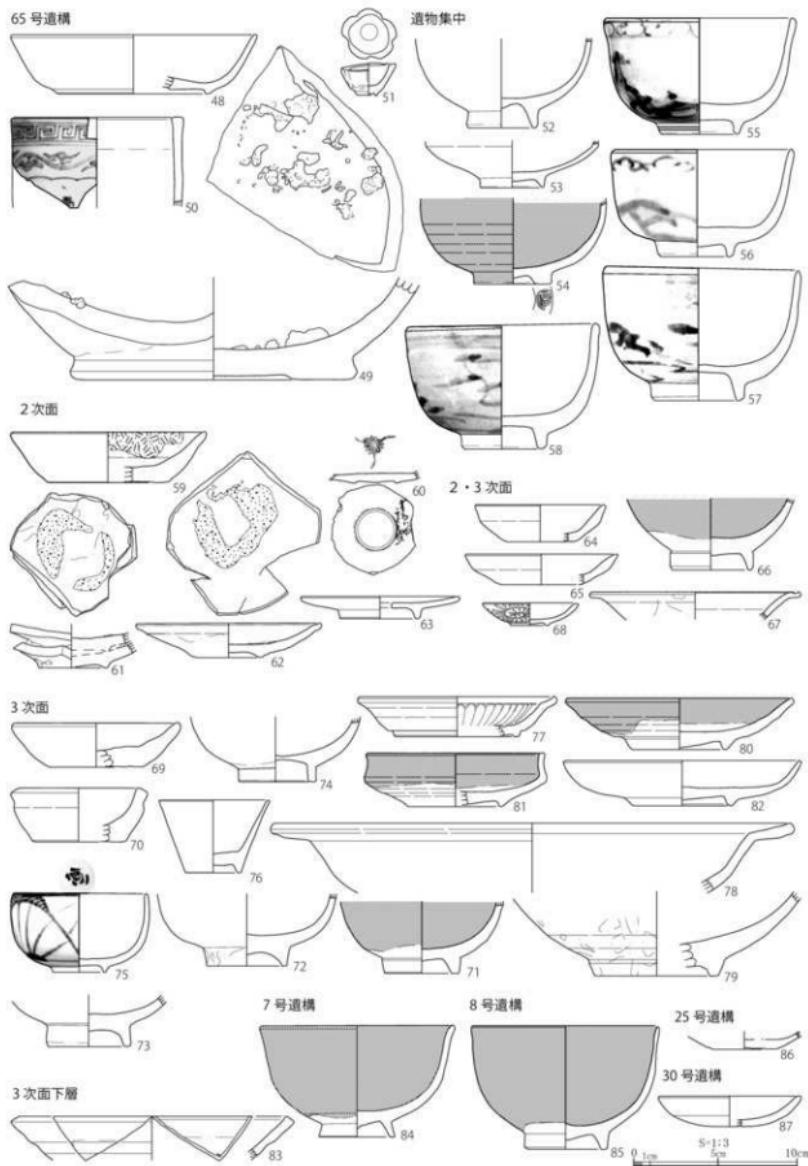


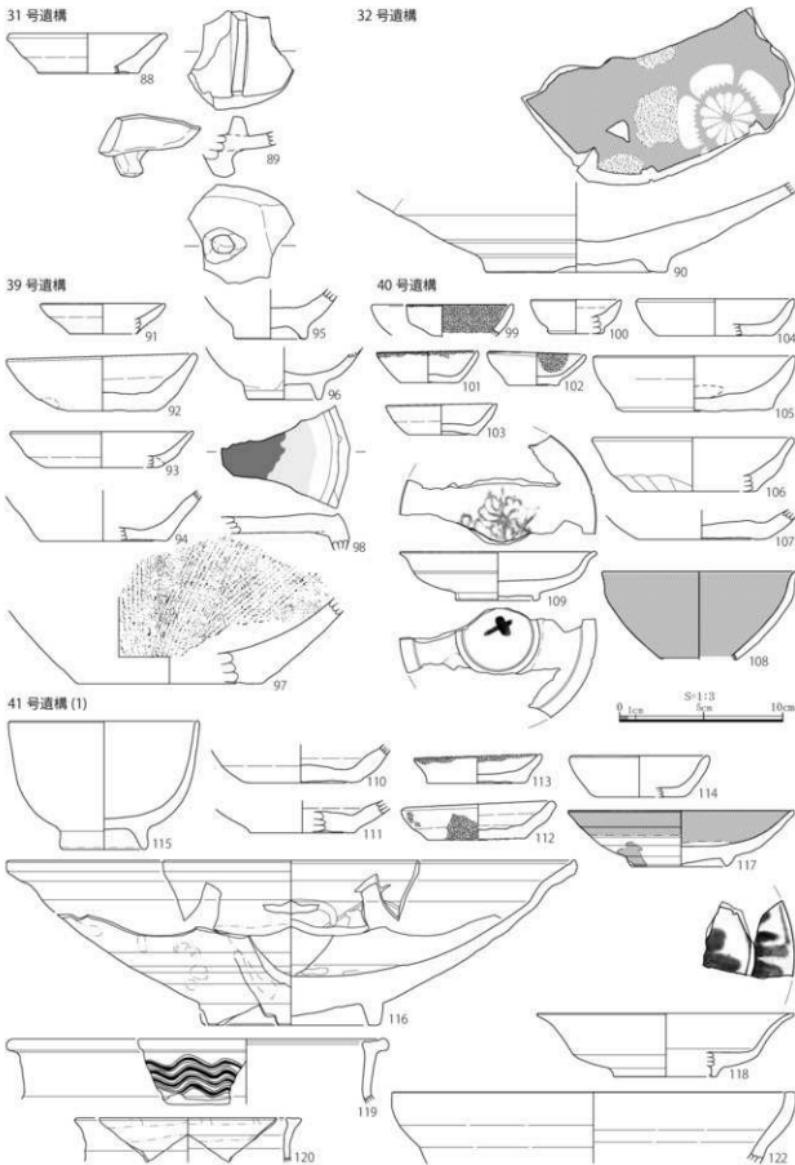
1号遺構



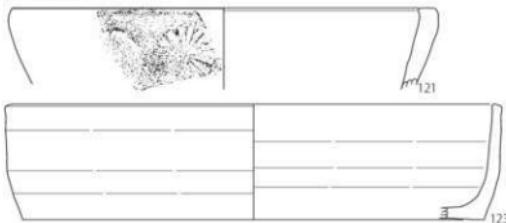
62号遺構



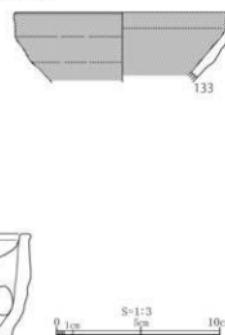




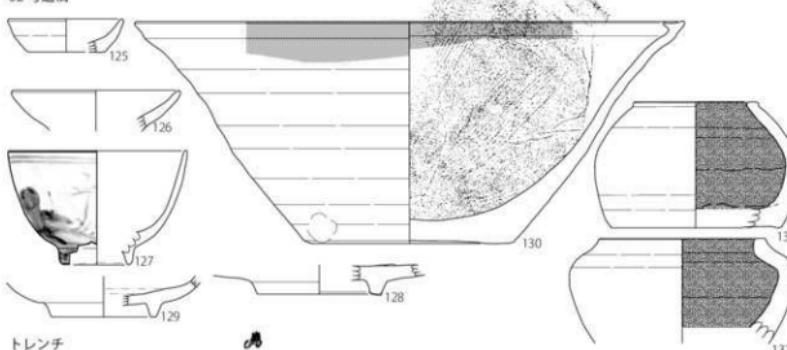
41号遺構 (2)



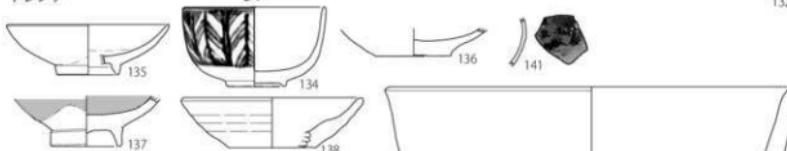
54号遺構



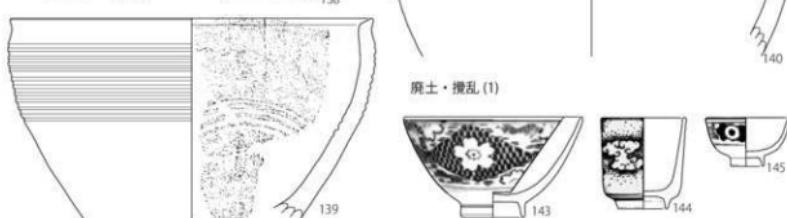
52号遺構



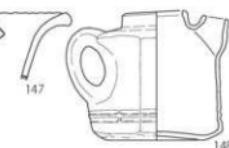
トレンチ



廃土・擾乱 (1)



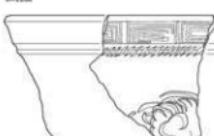
## 腐土・攪乱(2)



147

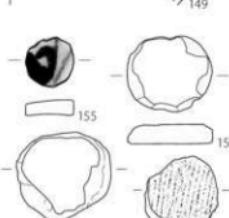
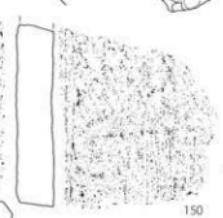
148

## 試掘



149

## 瓦・土製品・ガラス



155

156

157

158

159

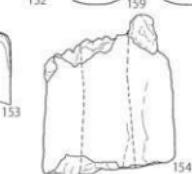
160

161

162

163

## 石製品(1)



0

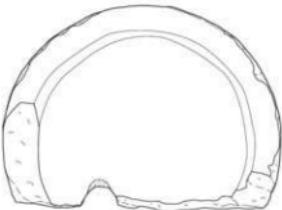
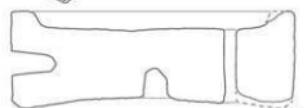
5cm

1cm

S=1:2(155~160)

5cm

10cm



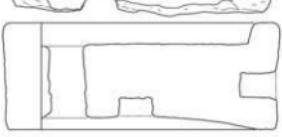
0

1cm

S=1:3(その他)

5cm

10cm



0

2cm

S=1:6(164, 165)

10cm

20cm



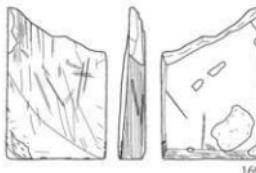
165

166

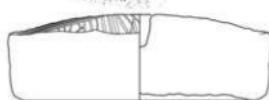
## 石製品 (2)



167



169

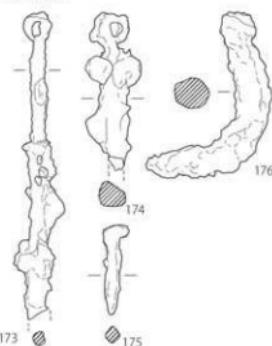


171

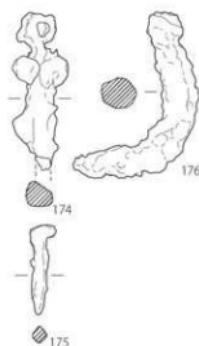


172

## 金属製品



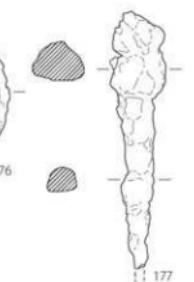
173



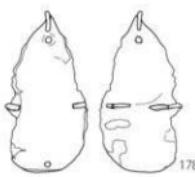
174



175



176



177



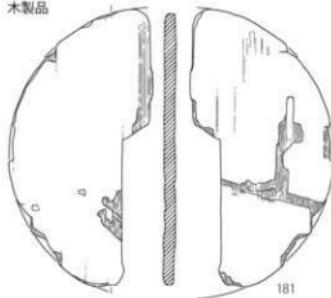
178

◎

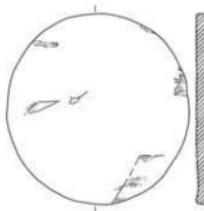
180

S=1:2(173~178, 180)  
0 1cm 5cm 10cmS=1:3(169, 170)  
0 1cm 5cm 10cmS=1:4(181, 182)  
0 1cm 5cm 10cmS=1:6(166, 167)  
0 2cm 10cm 20cm

## 木製品



181



182



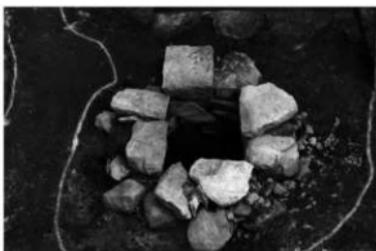
1次面全景（南から）



2次面全景（南から）



3次面全景（南から）



井戸跡（南から）



遺物集中出土状況



石列 1・2（北から）



1号遺構完掘状況（東から）



1号遺構土層断面（西から）



杭列検出状況



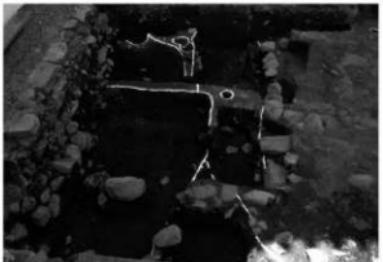
1号遺構下層土層断面（西から）



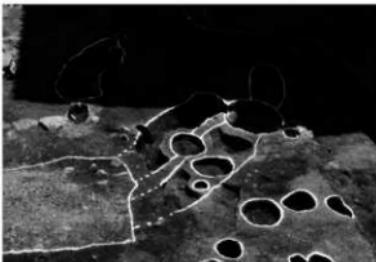
杭列土層断面（西から）



62号遺構完掘状況（北から）



39・40・41号遺構完掘状況（東から）



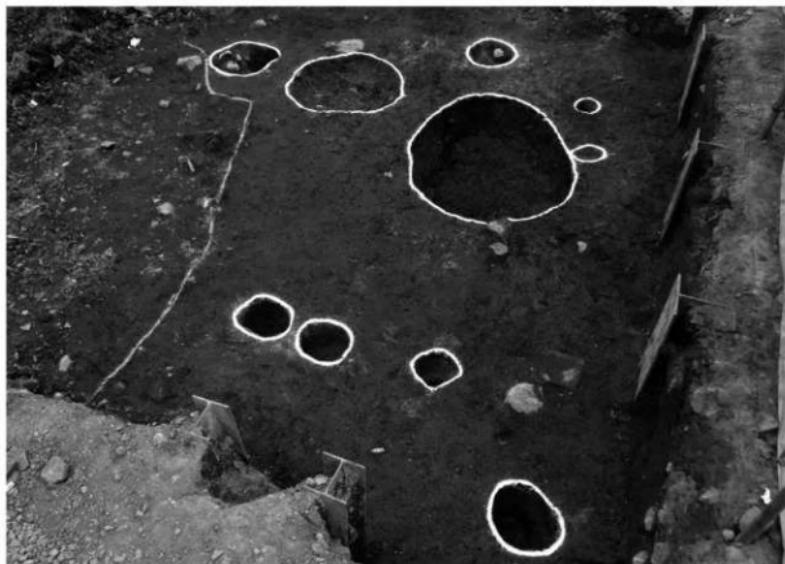
3次面北半遺構完掘状況（北から）



東調査区1次面全景（北東から）



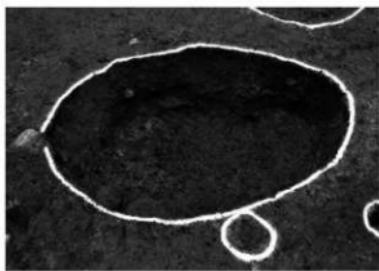
東調査区2次面全景（北東から）



東調査区3次面全景（北東から）



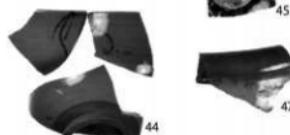
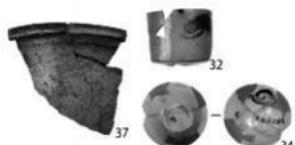
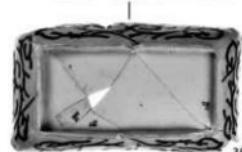
52号遺構土層断面（南から）



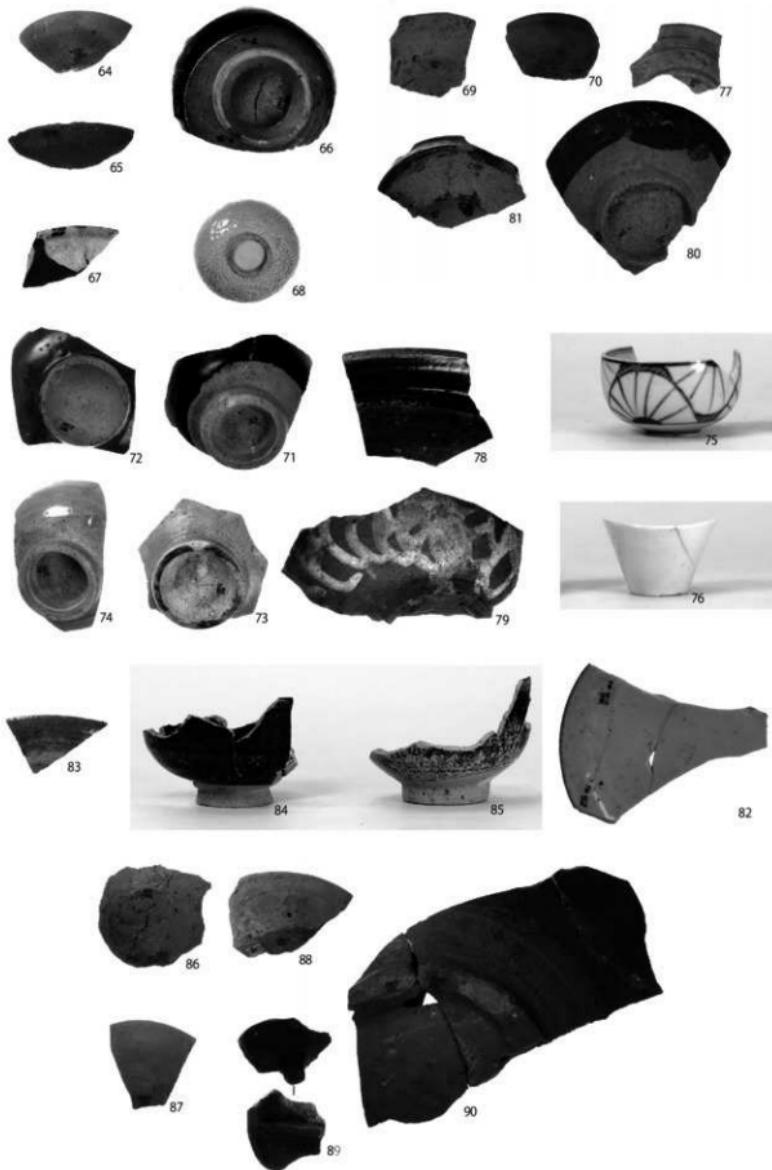
52号遺構完掘状況（北から）

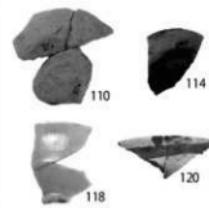
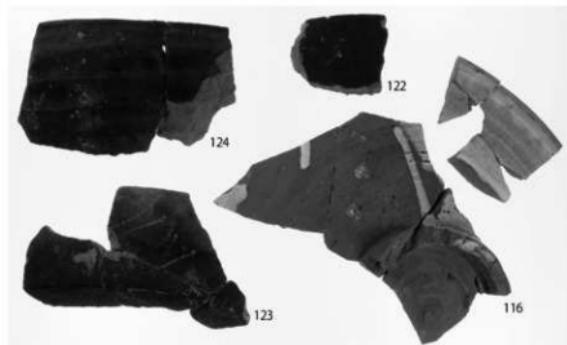
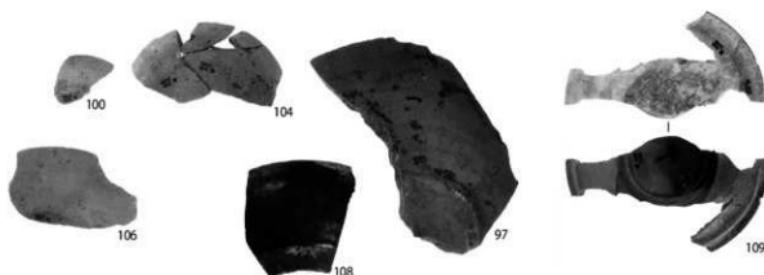
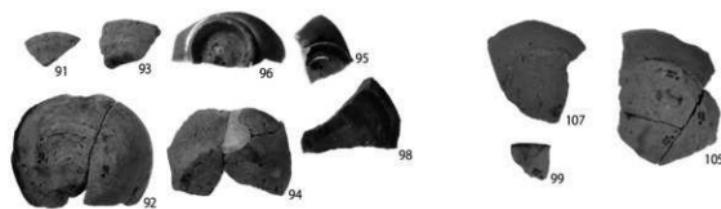


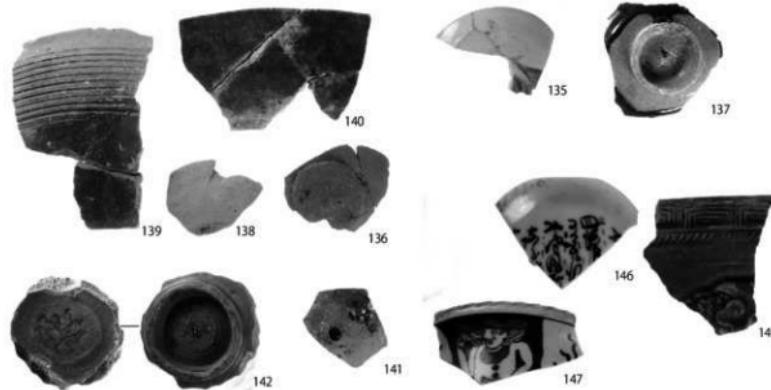
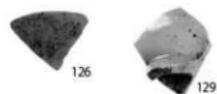
55号遺構土層断面（東から）



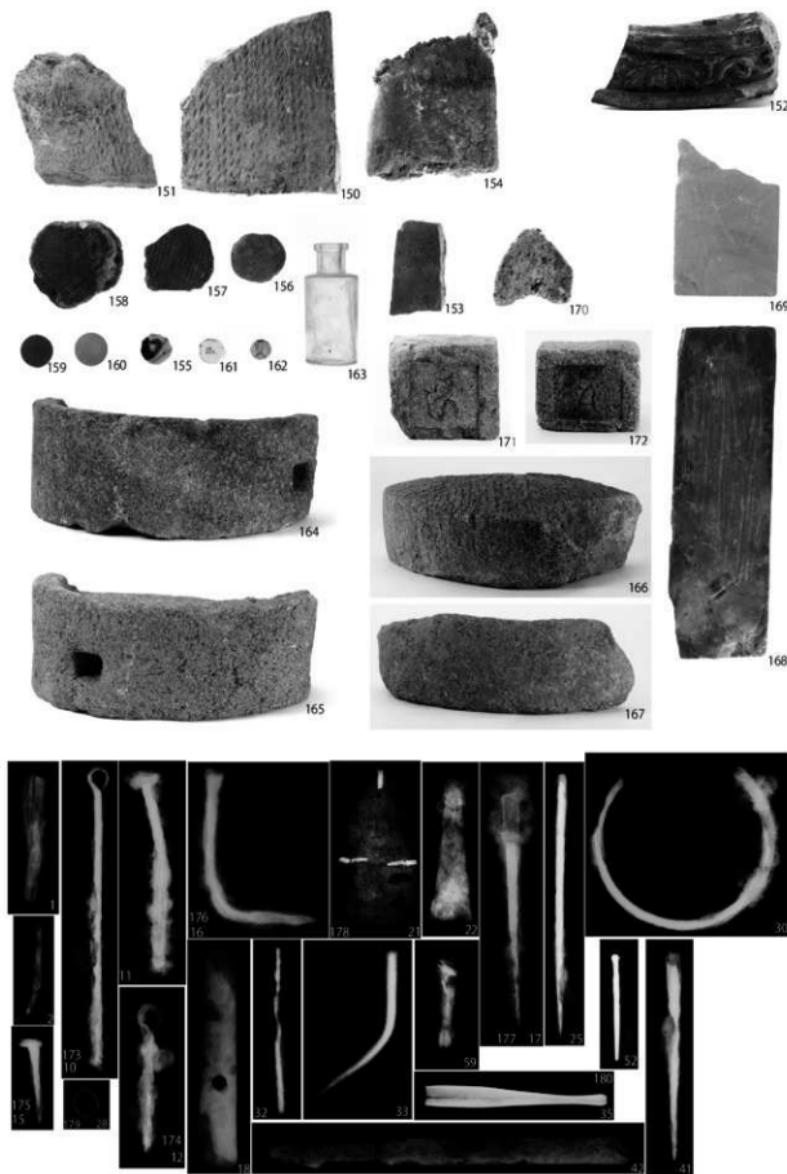


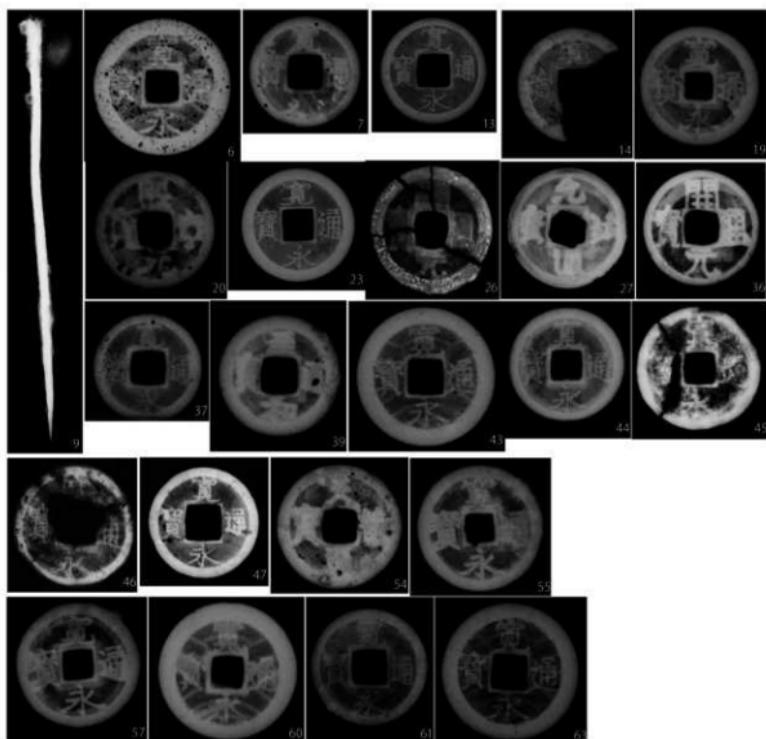






写真図版 10





181

182

報告書抄録

長野市の埋蔵文化財第 142 集

長野遺跡群

## 善光寺門前町跡（4）

一八幡屋礪五郎大門町店増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

平成 28 年 3 月 17 日 印 刷

平成 28 年 3 月 25 日 発 行

発 行 長野市教育委員会

編 集 文化財課埋蔵文化財センター

印 刷 法規書籍印刷株式会社

